

---

# 紅い瞳に映る赤

雨雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅い瞳に映る赤

### 【Nコード】

N2975M

### 【作者名】

雨雨

### 【あらすじ】

“吸血鬼”

それは紅い瞳、白髪の人型生物。  
人よりもはるかに高い身体能力と異常なまでの再生能力を持ち、動物の肉―特に人を好む―を食する。

人々は吸血鬼におびえながら抵抗を続け、いくつかの国家を作り上げていた。

そんな吸血鬼に育てられた過去を持つ人間、ダイルは現在、ルティル国軍第三部隊副隊長となっていた。

ダイルは生き別れた吸血鬼の“義母”を探しながら、今日も義母の同族をその手にかける。

ある日、一匹の吸血鬼がダイルの前に現れ、違う名で呼んだ。

“ナクタルシート”と。

それは、義母の消息に、そして自分が何者であるのかにつながるキーワード。

## プロローグ（前書き）

この小説に出てくる吸血鬼とは、いわゆるドラキュラの吸血鬼ではなく、作者の独自の定義に基づく“生物”です。

吸血鬼という仮称を与えられたまったく異なる生物だと思ってください。

ドラキュラの吸血鬼モノを期待して来られた方には申し訳ありません。

## プロローグ

“吸血鬼” 動物の血肉、特に人間を糧とする種族。

彼らが吸血鬼と呼ばれる由縁は、白い髪、紅い瞳で日の光を嫌うからだと言われている。

が、彼らは日中でも活動可能である為、その由縁が正しいかは不明。それらが現れたのは、遠い昔、“ひやく緋薬”という薬を一部の人間が飲んだせいである、と言伝えられているが、確かな事は不明。

ルテイル国立歴史館のデータより抜粋

僕らが幼いころ、僕らは養母ははが大好きで、彼女は僕らの憧れだった。

白いウェーブの長い髪と、綺麗な真紅の瞳の彼女は母親を知らない僕らにとって母親という存在がどういうものかを教えてくれた。優しく、けれども怒ると怖くて、そしていつも暖かい愛情で僕らを包んでくれる彼女が大好きだった。

僕らはみんな仲良しで、血は繋がってなかったけれど、友人という存在よりも、もっと強い絆で結ばれていた。

きつと大人になっても、いつまでも僕らは一緒に養母と暮らせると思ってた。

そう、僕らがお前たちの望みは何だ、と聞かれたら、迷わずこう答えただろう。

“養母と僕ら、みんなで変わらず暮らす事”

それが僕らの無言の約束。

けれど、僕らの望みも約束も、養母と同じ髪と瞳の奴らに引き裂かれた。

そいつらは養母がいない時やってきて、その中の一人、三つ編みの女が僕らを見るなり言ったんだ。

「食っていいぞ」って。

僕らは最初、いったい何のことなのかさっぱりわからなかった。けれど僕らの一人が傍にいた白髪の仲間の一人に左腕をいきなり齧られて、その意味がわかった。

僕らの一人の腕が紅く染まり、大量の血が迸りながら飛び散ったのを見て僕らは何が起こり始めたのかを知った。

僕が何故助かったのかは覚えていない。

覚えているのは、逃げ惑う僕ら兄弟が、白髪の奴らに一人、また一人と血塗れにされるのを横目で見ながら、必死に逃げた事だけだ。その後どこをどう走って、僕だけが逃げおおせたのか。

気が付いた時には、僕は緑色の光のドームに覆われた街を目指すトラックの中にいた。

そして僕は知ったのだ。

養母も含め、あの白髪の奴らが、僕らとは違う生き物だという事を。

彼らにとって、僕たち人間は食料で、彼らがこの世界の食物連鎖のピラミッドの頂点に立つ存在だという事を。

彼らは僕ら人間にこう呼ばれている。

“吸血鬼”、と。

## プロローグ（後書き）

初めて書いた小説なので文章や表現等、つたない部分が多々あると思いますが、読んでいただけると幸いです。

襲撃されたトラックは三台。

一つの荷台には食料等の物資を積んでいた。

後の二つには物資の他にそれを警護する人間がそれぞれ十五人ほど乗っていた。

報告内容は、全滅、という言葉が強調された。

襲撃した奴らが何者かは明白すぎて言及などされない。

被害者たちの死体及び荷物の回収は行う必要が無い、との事。

おそらく死体は無い、と見ていいだろう。

どうせ彼らの胃袋に収まっているのだから。

見つかった所で骨や肉片や食べ残しが見つかるだけだろう。

けれど、僕はいつもの様に一人で見に行ってみた。

もちろん、相棒は連れて行った。

現場は、ルティルの国境、永緑壁えいりよくへきと呼ばれる緑色の光のドームから約四十キロほど離れた地点。

そこは隆起の激しい地形で、大きな岩が其処彼処に転がる所である。

それ故に、見通しも悪く、奴らの襲撃に一步後れを取ったに違いない。

僕らが、永緑壁外へと出るときに必ず装備するゴーグルは吸血鬼の存在は感知できるけれど、その姿を肉眼で一度確認しない限り捕捉することは不可能なのだ。

現場の状況はというと、簡単に短く言えば惨状。

長々と言えば人間を食い散らかした残骸、骨とか、肉片とか、千切れた指とか、皮膚ごと引き抜かれた髪とかがそこら中に散らばって、土が被害者たち+の血で赤黒く斑点模様、いや、全体が染まっているって言うていいかもしれない になってて、夏の湿気と暑さで吐きそうな位の悪臭が漂っていて、早くも蠅や蛆虫が死体に



群がってて、あと言う事が有るとするなら…吸血鬼の生首とか、その胴体とか、奴らの頭が撃ち貫かれた死体も数体転がってるって感じだ。

見慣れてしまったとはいえ、この光景には胸が悪くなる。

この悪臭も耐え難い。

これはもう、じつくり眺めてなんかいないでさっさと作業を終わらせてしまふに限る。

腰に提げたウェストポーチのサイドポケットからゴム製の手袋を取り出して身に着けた。

胸ポケットから小刀を取り出して、まずはすぐ傍の人間の残骸から採取し始めた。

被害者それぞれから採取した肉片や髪、骨などは小さなビニルパックに一つ一つ入れて、ウェストポーチの中に収める。

一時間くらいかかったかもしれない。

手持ちのビニルパックは無くなってしまったが、まだ採取してない被害者が数人いるようだ。

なにしろ、ちぎられた残骸は四方八方に飛び散っていて、どれが誰だかの判別がいまいちだったから。

「知能あるくせに、行儀悪く食い散らかすなよ」

ついそんな独り言を漏らしてしまった。

言ったついでといったら悪いが、足元に転がっていた吸血鬼の胴体を思いつきり踏みつけてやった。

不思議な事に、吸血鬼は他の動物は襲うくせに、自分の同種は絶対に食べない。

だから、ルテイル国外で発見される死体で、発見が早ければ（腐蝕が進んでいなければ）、その死体が人間か吸血鬼であるかは、子供でも見分けが付く。

人間は残骸、吸血鬼は首無し・生首・頭を何かで貫通したのいずれかの死体といったふうに。

ま、説明したところで僕のような兵士しかお目にかかる機会など

ないだろうし、誰が聴いているって訳でもないけれど。

とにかく、これ以上作業を続ける事は出来ないので、僕は乗ってきたバイクをリモコンで呼ぶ。

呼ばなくても四百メートルくらい向こうに止めてあるから歩いていけばいいんだけどね。

ところが、数分も待たずに来るはずのバイクが来ない。

おかしいな、と思って近くの高い場所に登ってバイクを停めた方角を見た。

バイクの輪郭が辛うじて見える。

その周りに、何か、動いているものが。

僕は、あまり目のいいほうじゃないから、よくわからないけど、僕のバイクが動いていない事は確かなようだ。

なぜ僕のバイクが動いていないのか、ある程度予測はついたが、はつきりしないのは気分が悪い。

僕はバイクに向かって歩き始めた。

バイクまであと六十メートルくらいの地点に来ただろうか。

首にかけていたゴーグルのランプが一回、点灯した。

ゴーグルをきちんとかけて見ると、ゴーグルの視界色はいつもの透明ではなく、黄色。

これは、注意しろ、という意味の色。

近くに吸血鬼がいる。

僕はゴーグルをかけたまま、バイクの形や色が何とか判別できるくらいに近づいた。

岩陰からそつと様子を伺うと、バイクはグチャグチャに解体されていた。

そこには黒い服を纏った、白髪緋眼の人型の生き物が三匹、僕のバイクを囲むようにうろついていた。

少し猫背気味の姿勢で、低く唸っては辺りを見回している。

たぶん、近くに人間がいると判断し、逃走手段を奪って持ち主が戻って来たところを襲おうと待っているつもりなのだろう。

吸血鬼は、知能があるといっても、僕ら人間と比べて、やっぱり頭が悪いと思う。

例え待っていても、待っている間に別の場所で他の吸血鬼に見つかって食べられるという可能性を考えたりしないのだろうか？

バイクが放置されてどのくらい時間が経っているかなど、考えているのだろうか？

放置されて半年以上経ってるかもしれない、という可能性もあるだろうに。

そうでなくても、バイクがあることによつて、近くに人間がいると判断したのなら、その近辺を探す、くらい頭を働かせればよいのに。

なんだか苛立たい。

そう、僕は吸血鬼たちのこういう頭の悪いところを見ると、無性に苛立たしくなる。

僕の養母は、吸血鬼だった。

けれど、彼女は決して頭が悪くなかった。

むしろ聡明で頭の回転の速い賢い女性だった。

僕の欲目も入っているかもしれないが、こんな奴らに比べるべくもない女性だったのは確かだ。

それなのに、養母はこんな奴らと同じ種族らしい。

こんな頭の悪い連中と僕の養母が同じモノだという事が、どうしようもなく腹立たしく思う。

はつきり言って、こんな奴らと養母を同じモノと思う事も、思われる事も不愉快だ。

僕は眉を顰めてズンズンとそいつ等に近づいていった。

近づく間に視界色を透明に設定しなおし、戦闘モードに切り替える。

一匹が僕に気付く。

気付いたヤツは雄のようだ。

野太い奇声を上げながら、口から涎をダラダラと垂れ流して突進してくる。

他の二匹　内一人は雌だ　も仲間の奇声で僕に気付き、驚く

べき速さで迫ってきた。

これが、吸血鬼。

人間とほぼ同じ姿をしている。

人間の言葉を理解できる。

人間ほどではないが、知能もある。

好物は人間。

そして人間には無い異様なスピードと馬鹿力と再生力。

生身の人間なら、一瞬にして喰われてしまうだろう。

そんな相手に僕は真正面から向き合った。

僕には奴らに負けない自信があるからだ。

人間が、人間という種族を絶やすことなくこれたのは、たった二つモノのおかげだと僕は思う。

えいりよくへき  
永緑壁と科学だ。

永緑壁は、吸血鬼からルテイル国を守る防護壁。

科学は、人間が吸血鬼に抵抗する手段。

その中でも、僕は科学が生み出した相棒をとても気に入っている。

僕は奴らが迫った刹那、躊躇い無く相棒を鞘から引き抜いた。

僕は鞘から柄だけを抜き取った。

刀身はない。

しかし同時に、引き抜いた柄には淡い緑色に発光するレーザー・サ  
ーベルが刀身の代りに伸びている。

一匹目。

僕に伸びてきた腕を薙ぎ払う。

吸血鬼の腕が焼き斬れてゴトリと落ちる。

二匹目。

飛び掛ってくる吸血鬼を後ろに跳んで避ける。

力の入れ具合からいって、跳躍距離は多分七メートル位だっただ  
ろう。

勿論、こんな事出来る人間なんていない。

僕だつて同じだ。

このジャンプ・ブーツを履いてない限り。

跳ぶ時の姿勢が悪かったせいでバランスを崩して着地する。

勢いのまま四メートルは後ろに滑り、とっさに左手を地に付けて  
ブレーキをかけ、大量の砂埃を上げたところでやっと止まる。

摩擦で手の皮がズルリと剥けたみたいだったが、そんな事気には  
していなかった。

すぐ傍に三匹目が迫っていた。

ゴーグルが目標を捕捉する。

下から足の間をすくい上げるように剣を振った。

相手は左足から腰にかけての下半身を斬られてその場の地面に倒

れる。

倒れた相手の首を僕は切断し、その切り離された頭の眉間に刃を突き立てる。

こうしない限り、こいつらは死なない。

脳みそに損傷を受けない限り、もしくは脳からの信号が途絶えな  
い限り、こいつらは再生するのだ。

現に、右腕を斬られた一匹目の奴は、斬りとられた腕を傷口に当  
てていたらしく、あと一皮で接着する、といった段階まで再生して  
いる。

相棒を引き抜き、切った頭を残りの奴らに向かって蹴りやった。  
吸血鬼の生首は放物線を描きながら宙を飛び、残った奴らの足元  
に転がる。

残った二匹は睨みながら慎重そうに間を取って僕を囲んだ。

僕は、そいつらにニヤリと笑って言った。

「どうした？ただの人間一人がお前らと渡り合っているのが珍しい  
か？

しかも、こんな子供に、って？」

二匹は険しい顔で更に唸り声を上げる。

言葉を話せない訳ではあるまいに、単純というか、やっぱり獣と  
いうか、呆れる。

僕は右の吸血鬼に斬りかかった。

その刀身を掴もうとした吸血鬼の手が一瞬にして焼き斬れる。

馬鹿だな。

レーザ・サーベルが掴めるわけじゃないじゃないか。

仲間の腕が焼き切れたのを見ただろうに。

学習しないヤツは、生き残る事など出来ない。

そのまま左肩から右胸にかけて、分断した。

落ちた上半身を片足で踏みつけて額から上を切断。

コイツも片付いた。

あと、一匹。

思ったとたん、ゴーグルが警告色、つまり、視界が紅くなった。  
すぐ横に残る一匹が迫っている、と認識する前に思わず振り上げた左腕に、思い切り咬み付かれた。

悲鳴を上げたのは、吸血鬼の方だった。

口を両手で押さえながら後ろによるめく。

震える手をそつとはずした口は、紅い泡を吹いて、吸血鬼特有の  
発達した犬歯どころか、歯が殆ど砕けていた。

そのチャンスを僕は見逃さない。

ジャンプ・ブーツで一氣に詰め寄って首を薙ぎ払った。

くるくると、放り投げられたボールのように回転しながら、頭は  
地面に落ちた。

その頭に近寄って、僕はしゃがみ込んだ。

その真紅の目が痛みと怒りで僕を睨みつける。

まだ、再生する余裕がこいつにはあるみたいだ。

意外と、しぶといじゃないか。

何か言ってるみたいだったが、胴体から切断されているため、ヒ  
ユヒユウと笛のように鳴るだけだ。

「不味い腕ですまないね。」

こっちは、だいぶ前にお前らの誰かにあげちゃったんだ。」

そいつ目の前で振った僕の左の手のひらは、ベロリと人工皮膚が  
剥げ、中からたくさんのコードや金属の骨格が見えていた。

そう、僕の左の肘から下の腕は、義手なのだ。

僕の腕は、五年前に吸血鬼に襲われ、食われた。

その時の記憶は少ないが、逃げている時にルテイル国軍の第三部  
隊隊長のジェガンに保護され、その後僕はこの腕を貰った。

ルテイル国に行つて初めて、僕は科学を、機械というものを知つ  
た。

僕は、素晴らしい技術だと思った。

もう諦めていた腕を、元通りとはいえないが、自分の思い通りに  
動く腕を得たのだ。



しかも僕の義手は、吸血鬼の刃が砕けるほど硬い。

二度と左腕を失うことはないことが嬉しかった。

手を動かす度にパラパラと細かい砂が落ちた。

「ああ、中に砂が入ってるや。またジエガンに怒られる。」

言いながら僕は吸血鬼の頭に刃を突き立て、その命を終わらせてやった。

ゴークルの視界は既に普通に戻っていた。

ゴークルで他にもまだどこかに吸血鬼が潜んでいないか、探索する。

半径百メートル以内に吸血鬼はいない。

念のために探索の感度と範囲を上げて確認したが、少なくとも半径5百メートル以内にも吸血鬼はいない。

相棒を元の通りに納める。

次に目を向けたのは、僕の乗ってきたバイク。

よくもまあ、これだけバラバラにしたものだ。

修理も出来ないほど適当に、細かく解体されていた。

これじゃあ、歩いて帰るしかない。

ここから歩いたらルテイル国境まで…五時間つてとこかな？

ジャンプ・ブーツを利用して帰るにしても、ちよつと、きつい。

ゴークルについているボタンを操作し、第三部隊本部に連絡を取ることにした。

「あ、もしも……」

「デューター副隊長？あんたどこで何してるんですか！」

間髪いれず、大音量の四十歳位の男性の声が耳にキーン、と響いた。

そんな大声でなくても、十分聞こえるってば。

思っただけれど、口にはしない。

「おおーガヴィール。今日非番じゃなかったっけ？何で君が出るのさ？」

「誰のせいですか！」

「……もしかして、僕のせいかな？」

「首絞めてやりましょうか？」

恨みがましい声である。

思わず苦笑いが漏れる。

「ま、そんな事よりさー、あれだよ。

この前の食料ダメにされた辺り。そこにいるんだ」

「ああ、ああ、わかってますよ。そんなこったろーと思ってました  
！」

そんなこと呼ばわりされたせいか、やけっぱちの様な口調でガヴィールは応対する。

「そんなに拗ねるなよ。今、現在位置調べるから」

ゴーグルで座標を調べてガヴィールに伝える。

「うん、そこにいるんだけど、吸血鬼三匹に絡まれちゃってバイク壊されちゃった。

ほら、僕ってモテるから。やんなっちゃうね」

軽口を叩いたのに、乗ってくれなかった。

「馬鹿いつてんじゃないやありません。あんたがそんなトコに行くから悪いんでしょうが。

あんたのデートのおかげでこっちは駆り出されて折角の休みがパ  
ーですよ！

家族サービスしないと、うちのヤツはしつこいんですから。

あんたも、仕事だって言ったときのうちのヤツの目、一回見てみ  
なさいよ。

おっそろしいんですから！

全く、どうしてくれるんですかあゝゝ」

最後は泣き落としに掛ってる。

親子並みの歳の差の上司にこれほど泣き言を言える奴も珍しい。

しかも、僕が年下である。

ま、そこがガヴィールの素敵なところだと僕は思っているけれど。  
「まあまあ、ごめん、僕が悪かった」

「嘘つけ！」

なんともフランクというか、無礼な言い方だけど、僕は気にしない。

だって、三六歳の大人が、たった十四歳の僕に従ってくれてるんだから　それこそ物好きとしか言いようがないが　これ位が丁度いい。

「いや、今はさ、それより迎えに来て欲しいんだ。ちゃんと、僕の休暇をその分、君にまわすから。だから、迎えに来てくれない？」

甘えるように言ってみる。

ガヴィールは沈黙する。

怒ってるみたいだ。

かわりに、二十歳半ば位の青年の声が届いた。

「デューター副隊長。今トラックを向かわせますから。

一時間程、待っていてください」

僕はトラックの荷台に乗るのがあまり好きではない。

食料とか荷物を運ぶのに使うのは仕方ないにしても、みっちり人が入った荷台からでは、いざ吸血鬼に襲われた時動きにくいからだ。それなら、バイクの方が動きやすくて好きだった。

正直な僕としては、不満を訴えなければなるまい。

「ええ〜？やだなあ。

いいよ、そんなたくさんで来ないで。

大勢だと吸血鬼に見つかっちゃうじゃん。

ザグラス、君でいいからさ、バイクで来てよ。

二ケツで十分」

「そうですか？それじゃあ……ああ、残念でした、副隊長。

ガヴィールさんが睨んでますんで、無理っばいです」

「なんでさー？ねえ、どうにかなんない？」

「私では不可能ですね。ガヴィールさんを説得する自信がございません」

にこやかな声は、明らかにこの状況を楽しんでいる。

「どうぞ、副隊長が説得なさってください」

「ねえ、ザック。君さあ、やな性格だよな」

「気のせいじゃありませんか？」

「ガヴィールウ。お願いー。いいでしょー？」

ここで押し問答してる内にまた僕、吸血鬼からダンスのお誘いがきちゃうじゃん。

いくら僕でも、一日に十匹も二十匹もお相手するのは疲れちゃうんだけどー」

仕方なく、僕は精一杯甘えた口調で頼み込む。

多少軽口を叩きつつではあるが。

「…だったらトラックを大人しく待っとけばいい事じゃないですか」  
不機嫌な声が答えた。

「この前貴重な兵士が奴らに三十人以上持ってかれちゃったばかりだよ？」

これ以上被害を増やすのはどうかと思うなあ」

「そいつのきっかけを作ろうとしてるのは一体誰でしょうかねえ？」

うう、反論できない。

どうしたものか。

そこで、僕ははっと思いついた。

「僕もさ、被害を増やしたいわけじゃないよ。いや、こんなこと言っても仕方ないよね。」

…うん、正直に言おう。

ガヴィール、僕はね、君に迎えに来て欲しいんだ。ザグラスと。

だって、そこら辺の兵士を護衛につけて帰るよりも、そっちの方が安全確実なんだから。

なんだって、一騎当千な君たちだよ？僕はそっちの方がいいなあ」

僕はガヴィールの反応を待つ。

ザグラスが吹き出すのが聞こえた。

次いで、ガヴィールの盛大な溜息が聞こえた。

照れたとか、そんな理由でないことは明白だ。

こんなことで時間をとればとるほど危険が増すことを考慮した、諦めの溜息だろう。

「仕方ないですね。わかりました。ザグラスとバイクで迎えに参ります。」

くれぐれも、吸血鬼に見つかからないように隠れて、そこから動かないでくださいね。

あんた、すぐうちよろするんだから」

くれぐれも、に力を込めて注意したガヴィールとの通信はそこで終わった。

通信機を思いっきり叩きつけるような切り方だった。

やれやれ、毎回のやり取りとはいえ、今日は特に不機嫌だったなあ。

疲れちゃいけないけど、首を左右に倒してほぐした。

さて、どこで待っていいようか？

僕は目に入ったでつかい岩の上に座って待つ事にした。

このあたりでは一番高い場所だ。

多分ここからならガヴィールたちが来るのが見えるだろう。

よじ登るのは面倒なので、ジャンプ・ブーツで一気に飛び上がって登った。

岩の平らな所に座って両手を後ろにやって体重を支えるような姿勢になるうとしたけど、熱くなった岩は、生身の手の方が火傷しそうな位だったので、諦めた。

仕方なく、今度は義手の方を枕に、生身の腕は腹に置いて仰向けに寝転んだ。

首から上と肘から下の腕以外は、着ている戦闘服が勝手に体温調節してくれるから、岩の熱さは感じない。

空を見上げた。

さっき倒した吸血鬼の死臭だろうか。

それともさっきまでいた現場の臭いが風に乗ってきたのだろうか。悪臭が一瞬して、あっという間に消え去り、また微かに臭ってくる。

その、繰り返し。

流れる雲だけが、常に変化する。

臭いはサイテーだけど、空の景色は綺麗だなあ。

いい天気だ。

と、ゴーグルの視界に通信が入る旨が表示される。

ザグラスがゴーグルから掛けてきたみたいだ。

どうしたんだろう。

「何？なんか不都合でも起きた？」

「いいえ、ただ、お伝えしところかなと思って。

ガヴィールさん、どうやら帰り道も説教する気満々のようですよ。

覚悟決めといたほうがよろしいかと」

「うげ……。わかった。上手い言い訳考えながら待ってるから」  
イヤフォンの向こうから忍び笑いが聞こえる。

「吸血鬼に見つからない様な所にいてくださいね」

「ああ、うん。わかった」

すっかり見つかりやすそうな所にいる事は黙っておいた。

僕は通常モードにしてからゴーグルを外し、今度は自分の目で空を見上げる。

ゴーグルを通すのとは違い、直で見る太陽の光が目には痛かった。

夏のキツイ日差しがじりじりと僕を焼いているようだ。

かといって、日陰に行く気にはなれない。

鳥肌が立つくらい寒いし、見通しが悪いから。

吸血鬼が近づいてきたとき、見通しがいい方が、対処しやすいってというのが、僕のこだわり。

とはいっても、この日の強さはちょっと、ねえ。

矛盾しちゃうけど、片手でウェストポーチからタオルを取り出して、顔の上にかけた。

息苦しいし暑さは増したけど、日の光が多少和らいだ感じ。

一眠りとかしたら、吸血鬼に見つかって寝てる合間に食べられちゃうだろうか？

それとも、ガヴィールたちが先に来て、寝てる僕を連れ帰ってくれるだろうか？

あ、そしたら説教聞かずにすむかも。

いいねえ。

あとは、そうだね。

副隊長は死んだって事にして、置いてかれるって可能性もあるかな。

もしかしたら、ガキの下にいるなんて真っ平だ、ってガヴィールたちに殺されちゃったりなんかして。

これ、ガヴィールに言ったら顔を真っ赤にして怒るかな？

普通にそのつもりでした、なんて言われたらどう切り替えたらいいだろう？

別に悲観しているわけじゃない。

単に、可能性ってだけ。

もちろん、今挙げた事だけじゃないだろう。

予想外の事もある。

そういうこと、考えるの好きなんだ。

予想通りであれば、クイズが当たったようで嬉しいし、予想外ならそれはそれで面白い。

とつさに、それに対して自分がどんな対処をするのか、できるのか。

そういうのって、わくわくしない？

少なくとも、僕はわくわくする。

目覚めた時にどんな状況下にいるのか、ちょっと楽しみだから、寝ちゃおうか。

もしかしたら、二度と目覚めないってこともあるかもしれないけれど、それはそれで、仕方ないか。

だって、眠るってとっても気持ちいいからね。

この誘惑に僕が勝てた事は一度もない。

抵抗すればするほど、瞼が強制的に閉まって、起きているか、眠っているかわからない状態を何往復もして、僕は結局、体が重たくなって、頭が軽くなる方―つまり、眠ること―を選んでしまう。

後のことなど考えずにね。

その後のことは、成り行きに任せるしかないよ、うん。

ほんと、成り行きてこんなもんだよね。

少なくとも、僕にとってはそんな感じ。

ああ、考えるのもできなくなってきた。

眠い、ね……………ぐう。



目が覚めたのは、どのくらい経ってからだろう？

すごく短い間だって気がするけど、人の感覚なんて、曖昧だよな。ホンの十分、寝てたつもりなのに、実際には一時間も寝てた、なんてよくある話。

少なくとも、タオルを透過する光から、まだまだ日差しは強いみたいだから、僕が寝てたのは、すごく短い間だって判断できる。

いや、もしかしたら、一日中寝てて、次の日になってるって可能性はあるかも。

そうだったら、すごくラッキー。  
すごく面白い。

だって、こんな野っ原で無防備に寝ててさ、虫に食われてもいなければ、吸血鬼に食べられてもいないんだもの。

僕はわくわくして顔に乗っけてたタオルを取って、起き上がる。

タオルをウエストポーチに直しながら、ゴーグルを装着。

ちょうど、熊のぬいぐるみのような座り方でゴーグルに表示される日時を確認。

あ、残念。

僕が居眠りしてから四十分が経過したくらいだった。

うーん、ガヴィールたちが来るまで、あと十分足らずってところかな。

岩の上で立ち上がり、大きく欠伸。

ついでに腕を伸ばしてストレッチ。

関節が小気味良く鳴って、ふう、すっきり。

ガヴィールたちがやってくるであろう方角を片手を額に翳して窺う。

お、あれかな？

今僕のいる岩石郡の途切れた場所から結構遠くに、こちらへ向か

っているメタリックな光を時おり放つ、黒点が二つ。

僕は笑顔で片手を腰に当て、もう片方はブンブンとそちらへ向かって回した。

そんなことしても、相手が気付くはずがない？

あつちが気付くかどうかはどうでも良くて、要は僕の気分の問題。

満足の仁王立ち。

「お目覚めですか？」

ぴたり。

僕の動きは止まる。

そろり。

僕は背後を窺う。

どきり。

僕の心臓が大きく鼓動する。

よろり。

僕は思わず後退る。

くらり。

僕は僅かに、眩暈。

僕の後ろに、吸血鬼が一人、立っていた。

起き抜けの僕に、話しかけてきたのはコイツ。

馬鹿な。

それが心の第一声。

だって、ゴーグルが、反応していない。

これが心の第二声。

僕はゴーグルが、どういった仕組みで吸血鬼の位置を判別しているのか知らないけれど、そのセンサが当たらない事は、少なくとも、今を除いてなかった。

しかも、一昨日メンテナンスしてもらったばかり。

壊れた、という事じゃないと思う、たぶん。

しかし、僕ってなんなのかな？

頭の中は、何からしていいかわからないくらいパニックなのに、体はまるで、別の冷静な脳から信号を受け取ってるみたい。

こんな状況でも、予めプログラムされた機械の様に、体が自動で動くんだ。

つい、五十分前と同じ行動。

いや、さっきよりもずっと素早くゴーグルを戦闘モードに切り替えて、レーザー・サーベルを構える。

「お待ちください。私は、あなた様と争う気はございません」

吸血鬼　オスだ　　が、両手を軽く肩の高さに挙げてまた、話す。

人間で言ったら、敵意はない、というポーズだが、吸血鬼にとってはどうなんだろうか？

わからないながら、僕は驚いていた。

ゴーグルに感知できない吸血鬼、っていう事にだけじゃない。

これほど物腰の柔らかな態度の吸血鬼は、僕は一人しか知らない。

養母<sup>よはは</sup>くらいしか、こんな喋り方をする吸血鬼を知らない。

養母以外の吸血鬼なんて、言葉を理解できるし、話す事も出来るけど、言ってる事が支離滅裂で、無駄に唸ってる事が多い。

こいつは、一体なんだ？

他の吸血鬼とは別の意味で、不気味だ。

僕は争うつもりはない、とか言われても、明らかに怪しいヤツをあつさり信用するほどお目出度い頭はしていないつもり。

じりじりと剣を構えたまま、後退り。

相手は信用してもらえないこの状況に困った、とでも言いたげに頬を掻く。

それが、余裕を見せているように思えて、緊張する。

「いつからだ？」

僕は慎重に訊ねた。

「あなたがお仲間の死体の破片を集めている時から」

普通なら何が？とか聞きそうなものを、こいつはあつさりと答えた。

勘がいいのか、察しがいいというか、頭の回転が速いというか。

「私はあなた様にお伝えする事があつて、参りました」

僕が問いただす前に相手は話を続ける。

「でなければ、あなた様にこうして話しかけたりなどしません。

私には、あなた様の首をへし折る時間も、五体をバラバラに引き裂く時間も十分にあつたのですから」

これには、認めない訳にはいかなかった。

こいつの言う事が本当にしる嘘にしる、いずれにしても、僕は話し掛けられるまでコイツに気付かなかつたのだから。

けれど、だからって刀を納める気にはならない。

僕は相手の出方を待ちながら、じつと相手を見据える。

相手は仕方がない、と思ったのか構わず続ける。

「まずは、私の同志を使ってあなた様の力量を測らせて頂いた事をお詫びいたします。

手荒ではありましたが、私にはこうするしか確かめる術がなかったのです。

ですが、それで私は確信いたしました。

ナクトルシート様、ですネ？」

言葉こそ疑問形だが、確固たる根拠を持った、確認だった。

「こんな事を吸血鬼に求めるのは馬鹿馬鹿しいが、もしお前が人間社会で言う礼儀というものを知っているならまずはお前が名乗るべきなんじゃないのか？」

僕は答えず、暫く沈黙した後、漸くそれを言った。

大丈夫、僕はまだ緊張はしてるけど、動揺はしていない。

どうして僕の名前を知っているのかわからないけれど、こんな奇妙な登場をしたヤツなら知ってもおかしくない、と無理な事を思っ  
て自分に言い聞かす。

「これは、失礼しました。

そうですね、すっかり失念しておりました。

私の名は、クバチ、と申します。

以後、お見知りおきを、ナクトルシート様」

わざとらしく目を見開いたあと、優雅にクバチは腰を折ってお辞儀する。

その隙に僕は岩を飛び降りて、さっきガヴィールたちが見えた方向に走り出した。

ジャンプ・ブーツを使って岩を飛び越え、走り、一直線に。

今日は使いすぎて膝が痛かったけれど、あんな不気味なヤツから逃げきるには仕方ない。

非常事態ってヤツ。

バイバイ。

「お待ちください！」

私はあなた様にお伝えする事があるのです！」

逃げだした僕に向かつて、背中でクバチが叫んでるけど、僕は振り返りもせずに走り続ける。

ガヴィールたちはまだ見えない。

「お待ちください。どうか、私の話を聞いてください」  
すぐ横に、クバチが来ていた。

僕はぎよつとし、ソイツに向かつて、未だ鞘に納めていないレーザ・サーベルを横に振る。

軽くうわ、とか言いながら、ひょいとクバチは避けて、視界にいなくなる。

またクバチが横に追いつく。

それを何回か繰り返しながら、僕は内心驚いていた。  
コイツの足の速さは尋常じゃない。

いくら吸血鬼だといつても、群を抜いている。  
まるで、養母ははと同じだ。

ホンとに、一体何者なんだろう？

岩石郡が途切れ、見通しの良い場所に出ると、ガヴィールたちがぼんやり確認できた。

よかった。

バイクに乗れば、振り切れる。

またクバチが横に並んだ。

もうこの時には、その顔は最初に見たときと違って、明らかに苛付いて優雅さの欠片さえ見えなくなっていた。

まさに、羊の皮をかぶった狼が本性を表したって感じた。

「いい加減にしてもらえませんか。

追いかけてこをしに私はあなた様に会いに来た訳ではありません」

さつきと変わらない丁寧さだが、吐き捨てるような言い方だった。「誰が、お前の話を聞いてやるって言った？」

僕は全く聞く気が無かったから、平然と答える。どうやらこれには腹が立つたらしい。

牙を剥いて本格的に襲い掛かってきた。

うわお、怖い顔。

やっぱり、吸血鬼は吸血鬼って事かなあ？

こんな事くらいであっさり襲い掛かってくるなんて。

人間が出来てない証拠だよ、うん。

あ、人間じゃなかったか。

僕は横に跳んでクバチの第一撃を避けた。

メタリックな影がどんどん近づいてくるのを横目で確認する。

余所見中にクバチが迫る。

あつぶないなあ。

ゴーグルは想定外の速さのクバチを捕捉できず、自分の目で確かめるしかなかった。

ちなみに、僕は視力がそんなにいい訳ではないけれど、動体視力には自信がある。

左手で相手の突き出した拳を受け流してそのまま片手で投げる。

クバチはひらりと猫のように回転し、着地。

ヤツは身軽でもあるようだ。

僕は素早くジャンプして距離をとる。

すぐに立ち上がってクバチは迫る。

レーザ・サーベルがクバチの体に一線を描く。

そう思った時にはクバチはおらず、横から長い爪が襲う。

さつきも確認したように、クバチは素早い。

僕はギリギリをジャンプ・ブーツで避けるしかない。

自分の反射神経の良さに感謝。

何度となく、ぎりぎりの攻防を繰り返す内、膝が諤々と震えだした。

チクシヨウ、限界だ。

何とか、ガヴィールたちが来るまで、持ち堪えなきゃ。  
どうする？ どうする？ どうする？ どうする？

僕の頭の中で色んな候補が上がり、すぐに消える。

それでも、まだ僕は心の中で楽しんでいるのを感じている。

また、クバチが僕に迫る。

僕はバランスを崩して地面に手を着く。

さらに具合の悪いことに、レーザ・サーベルが光を失いつつもあった。

バッテリーが切れ掛かっているのだ。

充電したのはいつ以来だっけ？

3ヶ月前にガヴィーに充電しろって言われたけどやらなかった記憶が微かにある。

やつちやったなあ、少しはガヴィーの言う事聞けばよかった。

そんな事を思うのは、まだまだ余裕の証拠、と僕は自分に言い聞かせる。

嫌な汗が顔を伝う。

僕は相手を睨みすえたまま、地面に膝を付いて喘いだ。



殺されるかな、と思ったが、予想外にも、素早く迫ってきたクバチが僕のすぐ目の前で止まった。

「お疲れですか？」

こう言つては失礼ですが、自業自得です。

私は、あなた様に危害を加える気はないと申し上げました。

私は、あなた様にお伝えする事を伝えたら、このままお暇する事を約束します。

ですから、私の話を聞いてください」

大きく息をしながら、怒った口調でクバチが言う。

吸血鬼の言う事をまともに聞いて助かったなんて話は聞いたことないし、初めて会った人間　コイツは吸血鬼だけど　を信用しろ、っていうのもおかしい話だろう。

僕はその言い草にムカついたけど、顔には出さず、言った。

「話せ」

「あなた様に会いたい、と仰られる方から私は派遣されました。

もし、あなた様がそれに応じるのなら、三日後にまた、先ほどあなた様が寝ていた岩の上に私が迎えに参っておりますので、よろしければおいで下さい。以上です」

クバチは無理矢理貼り付けたような笑顔を僕に向けた。

なんだそりゃ？というのが率直な感想。

「誰だ、ソイツは」

とりあえず気になったことを確認した。

「それを今、申し上げる事は出来ません」  
ふざけんな。

「それで、お前の言うナクタルシータ、というヤツが応じると思ふのか？」

「あなた様が、ナクタルシータ様です」

きつぱりとクバチは言う。

「僕が、お前に名乗ったか？」

「いいえ。ですが、私があなた様をナクトルシータ様だと判断したので、あなた様に申し上げました」

「じゃあ、僕が、もしそのナクトルシータだとしたら、答えは一つ。断る。」

お前らにのこのこ付いて行って、何かメリットがある訳でもない。食べられるのがオチだ」

僕にはそれが、比較的に頭脳が発達した吸血鬼による、新しい狩猟方法だと判断した。

まだまだ、頭の悪いやり方ではあるけれど。

「まさか。」

あなた様を食べる吸血鬼など、この世にいる訳がありません。

危害を加える事も、ありえません」

わざとらしい驚いた顔で左右に首を振るクバチ。

その言葉に、僕は大笑いした。

「何か、おかしい事でも言いましたでしょうか？」

突然笑い出した僕を見て、戸惑うようにクバチが首を傾げる。

それはそれは、ありがたい事だなあ。

全く、そんな事で相手が乗り気になるとでも思っただろうか？

僕はくだらない嘘をつくものだ、と思った。

ならば、僕の左腕はどう説明する？、と言ってやりたくなかったが、笑いをおさめ、他の事を口にする。

「お前の言葉だけで信用する人間がいたら、見てみたいよ」

僕は不思議そうな顔を向けるクバチを見やりつつ、笑いを噛み殺す。

面倒なことをせずに、さつさとどめをさして、そいつのところに僕を連れていった方が早いというのに、それをしないクバチの頭の悪さを心の中で笑う。

「…そうですね。ええ、そうですね」

そう言つてクバチは腕を組んで眉根を寄せる。

その仕草は最初に見た時のような、なんとも優雅なものだった。  
「では、ごうしましょう。」

三日後、お迎えの際にカルネアを連れて参ります」

「カルネアを連れて参ります」

クバチがそう言った瞬間、銃声が辺りに響いた。

弾が、クバチの足元の地面にめり込んだ跡を残す。

クバチは素早く跳び退つてもう目の前にはいなかった。

「デューター副隊長！」

声の方に目を向けると、中年男姓　ガヴィールが手放しでバイクに乗り、銃を構えてかなり近い所まで来ていた。

その乗り方、危ないからやるなっていうのも僕に言ってるのに、自分はやるんだ、ガヴィー…。

それからちよつと遅れた所に、やつぱり銃を構えた青年　こちらは片手だが　ザグラスの姿がある。

「どうやら、お迎えが来たようですね。

では、三日後に」

少し離れた場所からそう言ってクバチはガヴィーとザックの銃弾の中を、恐るべき足の速さであつという間に走り去った。

「待て！」

僕は思わず叫んだ。

けれど、それで待つ訳がない。

僕がさつき証明済みだ。

「無事ですか？」

いつの間にか、ザグラスが膝を付いて僕を覗き込んでいた。

「顔色が悪いですよ」

クバチに顔色が変わったのを見られただろうか？

いや、ゴーグルで顔半分は隠れてたから、わかつてはいないだろう。たぶん。

「大丈夫だよ。少し、疲れただけ」

僕はゴーグルを首に提げてから、首を左右に振った。

クバチを追ったガヴィールもすぐに戻ってきた。

こんな時に深追いするのは上策じゃない。

いい判断だ。あとで褒めてあげよう。

「どこも、齧られたりしてませんね？」

「ゴーグルを外して近づいてきたガヴィーの方が、襲われたんじゃないかなと思うくらいに顔が真っ青になっていた。」

「大丈夫。来てくれて、ありがとう。」

ブーツの使いすぎで足がダメになってたんだ。

もうちょっとで、殺されてた」

僕は思い出したように相棒の柄を元に戻しながら、無理に笑った。

「今のヤツが、応援を呼んで来るとも限りません。」

すぐに帰りましょう」

周りをゴーグルで確認しつつ、ザグラスが言う。

よかった。ガヴィーたちはクバチの話が聞こえなかったみたいだ。

ガヴィーが立てない僕を抱きかかえてくれた。

そして自分のバイクに乗せてくれる。

二台のバイクが軽いエンジン音を立ててからすべらかに発進する。

僕は、ガヴィーの背中に掴まりつつ、クバチの消えた方向を振り返った。

カルネア　養母<sup>はは</sup>が、生きている？

養母の名前だけで、僕は頭がガンガンする位、動揺していた。

## 9（後書き）

声だけの登場人物がやっと姿を出しました。

そこには、ごちゃごちゃと僕には良くわからない機械が雑然と並んでいた。

でっかい洗濯機みたいなものや、太いパイプで壁に繋がっているガラスケース、冷蔵庫っぽいものには計器類がついていて、他にもいくつかのランプのついた箱や、これまたごちゃごちゃとケーブルとかがぼさぼさの髪のようにくっついたものとか他にも色々。

いや、雑然、と言うのは間違いかもしれない。

機械にはそれぞれの役割があつて、それをスムーズ、かつ有効に使えるような配置にしてあるのだ、とジェガンが以前ふんぞり返って言うていたから、それなりの理由があつてそういった並びにある、とジェガンの面目のためにも言ったほうがいいのだろう。

棚にはガラスでできた様々な形の器や管、小さなプラスチック製の変な形の容器がいっぱい詰まったビンとか、液体の入ったビンとか、こちらは以外にもきちんと分けられて整理されている事からも、ある意味説得力があると僕は思っている。

そんな部屋をガラス越しに見ながら、僕は上半身を軽く起こす姿勢になるベッドに寝ていた。

こちらにも、いくつかの計器類が置かれているが、部屋がこちらの方が広いせいか、向こうに比べれば整然としていた。

僕は、今は戦闘服を脱いでタンクトップに短いスパッツといった軽装をしている。

横においてある台の上に投げ出した左腕は人工皮膚を完全に剥がした状態だった。

今その左腕は、何本ものいろんな色のケーブルで二・三の計器に繋がれている。

その台の横、僕の左側には丸メガネをかけたもうすぐ老人と言われる年齢に差掛かるであろう、そんな見た目の老人―結局老人って

いつちゃったよーが計器類を見ながら椅子に座ってそれはそれは渋い顔をしている。

「ふむ、洗浄は終わったし、特に異常もないな」

計器のモニタを眺めて、ほっとしたのか溜息交じりの口調で眉間に寄っていた皺を緩めた。

「よかった。ついうっかり、ってヤツだね。どうなる事かと思ったけど」

僕はにこやかに言った。

「バカたれ。何がうっかりだ。よく気をつけるとこの前言ったばかりだろうが」

立ち上がりついでにペーン、と額を叩かれた。

結構、痛い。

うーん、頭痛がするのに容赦のないじじいめ。

「そうですねえ、戦闘服なんだから転がっても痛くないでしょう。そのまま転がればいいでしょうに」

今は白衣を着て、計器に出たデータを記録装置に打ち込みながら、こちらを見もせずにザグラスが老人に同意する。

「そうは言ってもねえ、ザック。

人の条件反射というものは、意識してても逆らえないものがあると思わないかい？」

「同意しかねますね。私は、副隊長のような悪趣味な戦闘服を着ていませんので。」

それに、手首を捻るからやりません」

ああ、そうかい。

僕が悪いつて事かい。

悪趣味って言っても肘から下の腕を剥き出しにしてるだけだろうが。

隊に支給される戦闘服は、普通は手首まで覆われるもので、手にもナイフが突き刺さらず、通気性が良い、といった特性を持つ特殊布でできた手袋を着用するので、ザグラスはそう言ったのだった。



ちなみに、僕は手袋もしない。

「そもそも、僕の場合、痛覚がないって事が問題なんだよ、うん。痛くないから、どうなっても僕に自覚がないから、ついやつちゃうんだよ」

僕はちよつと悔しくて言い返してみた。

「だから、他の兵士と同じように戦闘服を着たらいいんじゃないですか？

痛みがないってのは同じなんですから」

ザグラスは相変わらず記憶装置に向かいながら、平然と答える。

まあね、そういう切り返しがくるとわかってたよ。

だけどさ、そんな嫌味言わずにさあ、もうちよつとなんかないかなあ？

そうへらへらと笑いながら痛いトコ突くのって、性格悪いと思うよ、僕は。

「ところでザック、ガヴィーはどうしたの？」

僕は話題を変えることにした。

「ガヴィーはパートナの所だろうよ。誰かさんのおかげで、名誉回復に勤しんでるんだろ」

ザックとの会話の途中、席を離れた老人が、よっこいしょ、と僕の横の椅子にまた座りながらザックの代わりに答える。

その掛け声、爺くさいよ。

老人は手に不透明なプラスチック製の箱を持っていて、それを僕の左腕に乗せた台の隅に置く。

「ジェガン、嫌味はもう少しオブラートに包んでくれないかな？」

「お前さんの反省がちいとも見えんなのでな」

フンッと鼻息を一つしてジェガンは言う。

嫌だねえ。

ちよつと脱走しただけなのに、大の大人が揃いも揃ってこんな風に責めるなんて。

僕だつて凹むんだよ？お手柔らかに願いたいねえ。

ジェガンは箱の中から人工皮膚を取り出して、僕の左腕に貼り付け始める。

「大体な、お前さんは自覚が足らんのだ。自覚が。」

お前さんはな、ここの副隊長だぞ？

そりゃあ、まだ子供だから、って事で多少の事にはわしゃ目を瞑るが、そんなお前の下に就く者はどうなる？

これからお前のために命を落とさにやらん奴らがいるかもしれん。

なのに、その理由がお前が脱走したのを追いかけてその途中で吸血鬼に襲われて死にました、なんて事を遺族の者たちに言うつもりか？

誰だってな、兵役などに就きたくはないんだよ。特に、ルテイルに生まれた者はな。

永緑壁の中にいれば、安全に暮らせるからな。

だがな、それでは国は立ち行かん理由がある事は、お前も知っての通りだ。

仕方なく、やってる事なんだ。

嫌々やってる者をまとめるわし達上部の人間は、そいつらの命を預かってる事を自覚して、責任を負わねばならん。

わかるか？ダイル。」

無骨な、節くれ立った手が意外にも器用に皮膚を貼り付けていくその手つきを見つめながら、僕はジェガンの話を聞いていた。

僕だって、知ってはいるんだ、そんな事。

自覚が無いっていうのも、そうなんだと思う。

だって、本当に実感がないんだもの。

副隊長なんて役職に就いて既に四カ月。

実際の仕事、特にデスクワークなんて、補佐役のガヴィーとザックがやってるもんだから、僕にはする事が無い。

僕が働く場所は、永緑壁の外しかない。

僕は、他の隊　もしかしたらこの隊の構成員かもしれないけど　が、僕を何て呼んでいるのか知っている。

“第三部隊の戦闘人形・ダイル”デューター”

そう呼ばれている。

当たっているかどうかは、僕には判断がつかない。

少なくとも、僕は、吸血鬼を追い払う事しか能のない人間なんだとは思っ。

それに不満を持った事もないし、吸血鬼を殺す事に躊躇した事などはない。

ただ、僕はそれを僕の仕事だと思って、実行しているだけ。

副隊長なんて役職に就くこと自体が間違っている、と僕は思っている。

部下なんて、本当は要らない。

下っ端で、自由にやってる方が、僕には向いてると思う。

なんでジェガンは僕を副隊長なんかにしたんだろう？

親バカも常軌を逸してると言われてるのに。

僕がぼんやり思考していると、目の前にぬつかさかさの乾いた手が僕の視界を覆った。

二、三度ゆっくり瞬きをする、

「真面目な話をしとるつちゅうのに、聞かんか、クソガキ。

しまいにやケツ叩くぞ」

両頬をむにいとつままれる。

ええい、僕の思考の邪魔をするなんて、なんてヒドイじじいだろ  
う。

でも僕はこう見えても親孝行だからね、恨みがましい目で見つめるだけで手を打とうじゃないか。

「デューター隊長、ガヴィールさんが来たみたいです」

記憶装置の横のモニタを眺めてザックが言う。

僕らのやり取りを聞いていなかったかのような、のんびりとした口調だ。

「ん？そうか。悪いがワシは手が空かんでな、お前さん開けてや  
ってくれ」

再び作業に集中しつつ、ジェガンは答える。

言われたザグラスは立ち上がってドアの横にあるいくつかのボタンを操作する。

この研究室は、部屋の主であるジェガンとその助手であるザグラス以外はドアをあけることができない仕組みになっている。

僕やガヴィーだって結構頻繁に出入りするのに、鍵である指紋認証盤には僕らの指紋は登録されていないんだ。

研究内容の流出を防ぐためとか何とからしい。

面倒くさいよね。

音も立てずにドアはゆっくりと左右にスライドして開いた。

「失礼します、デューター隊長、デューター副隊長。

ルテイル国第三部隊副隊長補佐官、ガヴィール」ベイト入ります」  
ガヴィールはきつちり隊規を守って入ってくる。

挨拶なんて下がないんだから、適当でいいのに。

律儀なヤツだ。

「僕もいますよ、ガヴィールさん」

ドアの横の壁に肩肘を付いて体を預けた姿勢でニコニコとザグラ  
スは言った。

そちらにちらりと目を向けて、

「ちょうどよかった。お前にも聞いてもらいたい」

そう言つて、ガヴィールはジェガンが手招きしたのを確認して入  
ってくる。

丁度目があったので、ザグラスに僕が“？”の視線を投げかけ  
ると、彼は肩を竦めてわからない、といったジェスチャで応えた。

「そこに掛けるといい」

僕の左手に集中しているせいか、ジェガンの示した指は椅子からちよつと外れた所を指していたが、それを指摘する者はいなかった。ガヴィールは言われたとおり、僕が乗っているベッドを挟んでジェガンと向かい合う位置の椅子に腰掛けた。

ザグラスも自分の作業をしていた場所に戻ったが、続きをする事なく僕たちの方を向いてガヴィールの話を待っている。

ドアは既に、やはり音も無くスライドして閉まっていた。

「まず、私の話を始める前に、副隊長に二・三質問があります」  
僕をガヴィールはじつと見た。

どこか緊張した、真剣な顔つきだ。

僕は軽く頷いて話を促した。

「今日私達が副隊長を迎えに行った時、副隊長と戦っていた吸血鬼についてです。」

副隊長は、あの吸血鬼を知っていたのですか？」

僕は意味を図りかねた。

「知り合いか、という意味？」

僕が聞くと、ガヴィールは頷くだけで肯定を示す。

「知らないよ。初めて会ったヤツだ」

「では、ヤツに副隊長は手傷を負わせましたか？」

「いいや。とても素早いヤツで、軽い傷くらいは付けたけど、完璧に捉えることはできなかった。ガヴィールたちが来た時点で、殆どの傷は治ってたはずだ」

僕は、忌々しく下唇を噛んだ。本当に、悔しかったからだ。

それを認めると、ガヴィールは今度は視線をジェガンに向き直した。

「私達が、臆げながらではありませんが、副隊長の姿を確認した時、

副隊長は膝を付いて吸血鬼と対峙している状態でした。

普通なら、吸血鬼は倒れた瞬間に上に押し掛かって首を折るなり、喉に噛み付くなり、襲い掛かってきます。

しかし、遠目ですが、ヤツは膝を付いた副隊長を眺めているだけに見えました。

あの時は、副隊長が襲われていると思って、何も考えませんでした。が、後になって思えば、吸血鬼としては異常な行動だと思われる。

そこで、私が考えた理由が二つあります。

一つは、その吸血鬼も動けない状態だった。

しかし、これは私とザグラスが駆けつけた時のヤツの動きと、副隊長の話を考慮すれば、あり得ない事です。

もう一つは、気に入らない事です。が、吸血鬼は副隊長になんらかの躊躇する要素があった、という事です。

僕は鼻に皺を作って不愉快、という事を示すが、ガヴィーはジエガンを真っ直ぐに見ていて気付いてはくれなかった。

しかし、躊躇したのなら、その前になぜ、副隊長が立てない状態になるほど逃げていたのか、説明できませんよ。

話をよく聞こうと思ったからか、ガヴィーの横に椅子を持って来ながら、ザグラスが口を挟んだ。

「それがわからんから、副隊長に聞いてるんだ」

ガヴィールは予期していたのか、何の事はない、という風に横に來た同僚に言った。

「いやいや、仮にそいつが副隊長に対して躊躇したのだとしても、相手は吸血鬼ですよ？」

獲物に対して子供だからと手心でも加えたと？」

「俺は吸血鬼の行動基準なんか知らんから、副隊長に聞いたんだろ」

そうして僕の直属の部下二人はほぼ同時に僕に視線を向けた。どちらの瞳も、どうなんだ？と言っている。僕は理解した。

仲の良い事だ。



向けられた2対の瞳に、僕は溜息をつきなくなった。

僕の過去からすると、仕方がないから、実際に溜息をつこうとは思わないが。

「あのさ、そんな期待の目を向けられてもさ、僕にだって、わからないよ。」

確かに、僕は壁外の人間で、吸血鬼を身近に育ったよ。それは認める。

けどさ、僕と接触していたのはたった一人だよ？

たった一例で、どんな評価ができるというのさ？」

僕はやれやれ、という様に首を左右に振りながら苦々しい顔を作る。

「その接触していた一人なのでは？」

まだ真剣な眼差しをガヴィールは僕に向けている。

ああ、これは参った。どうやら、僕は疑われているらしい。

正確には、僕ら、かもしれない。

その疑いが何に対してかは、不確定だが、まあ、想像の範囲内の事だろう。

僕は今度こそ溜息について、ガヴィーを真っ直ぐに見た。

「ありえない。僕がその人を間違えるはずがない」

そもそも性別が違う、とは言わなかった。

僕がきっぱりと断言すると、ガヴィールはほっとしたような、まだ納得していないような、変な表情になった。

「残念。ガヴィールさんの予想は全部ハズレでしたね」

あっけらかんとザグラスが言った。

そのあまりにも楽観的な態度に、じろりとガヴィールは彼を睨む。「それで？」

今まで作業をしながらずっと黙ったままだったジェガンが口を開

いた。

「は……。それで、とは？」

一瞬、戸惑うように視線を彷徨わせてガヴィールは聞き返す。

「だから、それで、その吸血鬼の行動の異常さにどんな問題があるのか、と聞いとるんだ」

「それは、その……」

「その、ではなからうが。」

吸血鬼の行動パターンをワシらは全て把握しとる訳じゃない。  
むしろわからん事ずくめといってよからう。

吸血鬼として、今のところそれが異常な行動というのは納得できる。

しかし、例外的にこんな行動をする吸血鬼がいた、それは何の為か、どうする気か、その行動にどんな問題があるか、どんな被害に遭うのか、どう対抗すればよいか、これを考えなければなるまい。

ただ、こんな行動をする吸血鬼がいた、それは何の為か。  
それだけしかないのならば、何の役にもたたんだろう」

静かに、作業を続けながらジェガンは言った。

ガヴィールは押し黙り、室内に重たい空気が流れる。

ジェガンは、疑われているらしい僕を弁護している。

僕が疑われる事に怒っている。

そう思った。

親バカだ。

間違いなく、底抜けの親バカだ。

いや、バカ親といった方が正しいのかな？

とにかく、公私混同もいいところだ。

ありがたいけれど、それこそ部下に示しが付かないのではないかと僕は焦る。

「あの、さ。ジェガン、ガヴィールが僕を疑うのは仕方ないよ」

僕は、俯いておずおずと試みてみた。

皆の視線が僕に集まる。

うう、重苦しいなあ。言い出しにくいじゃないか。

「ガヴィールの言ってる事に、少しは納得できるもの」

僕は降参、とでも言うように軽く両手を上げようとしたが、左腕はまだ全ての皮膚を貼り終えていなかったので上げるのは憚られて、右手だけの微妙なポーズになってしまった。

「その根拠は？」

ジェガンが最後のパーツを貼り付けながら聞いた。

「うん、僕はあの吸血鬼の事を知らなかったけれど、アイツは僕の事を知っていたっぽいって事」

説明するのが何だかむず痒くなって、右手で首の後ろ辺りをガリガリ掻いた。

「知っていたっぽいとは？」

今度はザグラスが聞いた。

「僕にもよくわからない。」

アイツは、僕の事をナクタルシートだろうって聞いてきた。

何のことかわからなかったから、僕は否定した。

けどね、ヤツは確認っていうよりむしろ、指摘に近い態度だったよ。

自分が僕をナクタルシートと判断したから、僕がナクタルシートだっって言ってた。

どうも、ナクタルシートって奴の顔自体を知っている風ではなかったけどね。

他の何かの要因で区別したみたいだ。

ねえ、ガヴィール、もし君が吸血鬼にお前はガヴィール「ベイト」だなんていきなり話しかけられたらどう思う？」

僕は首を傾げて片方だけ口元を上げる。

「そう……ですな。気味が悪い、とでも言いましょうか。何ともいえない不安感を覚えます。」

多分、動揺することでしょう。

そして何故、吸血鬼に名前を知られているのか、気になります。もし、問い詰める事ができる状況、周りに他の吸血鬼がおらず、また他の吸血鬼が来ないとわかつている上で、相手が喋る事には差支えが無く、こちらに危害を加えない状況とでも言いましようか、そのようなこちらが圧倒的に有利かつ危険のない状況下であれば、納得のいくまで尋問しようと思います」

顎の剃り残した髭が気になるのだろうか、手で擦りつつガヴィー  
ルは考え考え答える。

「ザグラスは？」

ザグラスにも同様の笑みを見せて僕は聞く。

「僕ですか？」

うーん、そうですねえ…まあ、気味が悪いって言うのは同じ意見  
ですね。

けれど、ガヴィールさんの言うような、そんな状況なんて滅多に  
…いいえ、全くないと言った方が正しいと思います。

ですから、私の意見としては、その吸血鬼に目の前から消えても  
らおう、ですね。

これは、殺すという事だけが当てはまる訳ではありません。

勿論、殺してしまえば私を私と認識して襲ってくる吸血鬼がいな  
くなる、とは言い切れませんが、とりあえず、今その時の不安を払  
拭できるでしょう。

ですが、確実に殺せる技量が私にあるかどうかは、その個体や状  
況によって変わります。

もし私にソイツを殺せるほどの技量がない場合、私がソイツの目  
の前からいなくなれば、これは目の前から消える、という意味では  
有効な手段かと。

要するに、この場合、逃げる、というのが一番有効だと思われま  
す。

一応言っておきますけど、逃げ切れるかどうかは別問題ですよ？

この場合、不安感も、疑問も解決する事はありませんが、一時的な身の安全は守る事ができます」

にっこりとザグラスは僕に笑いかけた。

「僕は、ザグラスの言った事と一緒に

逃げるのを選んだ。

僕がザグラスの意見と違う所は、相手を倒せるだけの技量があるかどうかなんて事は考えずに逃げたって事かな。

どうしてだと思う？」

僕はジェガンを見た。

作業を終えたジェガンは僕が左腕を置いている台に肩肘を付いて、足を組んで聞いている。

僕がジェガンの答えを待つ間、左腕の調子を試す為に拳を握った。開いたりした。

うん、いい感じた。

「それで？」

僕の言った事を無視してジェガンが言った。

「それで、その他にはそいつは何を言ったんだ？」

その吸血鬼がお前の事を知っていた上で殺そうとしていたのなら、お前が立てない時点で殺されただろう。

ところがどっこい、お前さんは生きとる。

別の目的があったから殺されなかった、と判断できる。

まあ、じっくり眺めた上で嬲り殺そうとしたのかも知れんが。

だが、別の目的でそういう行動をしたとして、吸血鬼が、食料として殺す以外の目的で人間と関ろうとする目的とは？

はて、一体何だろうか、のお？」

僕をジェガンは見据えている。

僕はゆっくり瞬いて彼を見つめ返す。

ジェガンは目を逸らさない。

## 15（前書き）

途中、視点が主人公から第三者に変わります。

先に視線をそらしたのは僕だった。

「部屋に戻る。ザグラス、連れて行って」

僕はザグラスを睨んだ。

僕はやはり膝を痛めていて、あまり歩けない状態なのだった。

「ええ、わかりました」

そう言ってザグラスは端に置いてあった車椅子を持ってくる。

ジェガンも、ガヴィールも何も言わない。

止めることもしない。

これ以上僕が何も話さないことが分かっているからだろう。

持ってきた車椅子が不満で、僕は言った。

「違う。君が、僕を抱えていくんだ」

「はい」

ザグラスは逆らわない。

僕はザグラスに抱えてもらって部屋を出た。

「やはり、あのくらいの小手先の芝居じゃ引っこかりませんでしたな」

ダイルとザグラスが出て行って暫くしての事。

ガヴィールは腕を組んで盛大に溜息をついた。

ジェガンは人工皮膚の入っていたケースを片付けている。

「いや、最初は引っこかっていた。

無意識だろうが、重要な情報を自ら話しておるし、そうしてしまつたことには気付いてもおらんだろう。

ただ、途中でワシらが何か知っていることは気付いたみたいだな。最後の、ワシの言い方が不味かったのかもしれない。

しかしなあ。全く、勘のいい、喰えないガキに育つたもんだ」



ひよっひよっひよ、と言葉とは裏腹に楽しんでるようにジェガンは笑った。

「御自分の子供の評価とは思えない言葉ですな」

苦笑いでガヴィールは返した。

「ところで、ダイルの持つて帰ってきた“被害者たち”は遺族のもとに送るよう、手配したか？」

ガヴィールに向き直ったジェガンは、真面目な顔に既に切り替わっていた。

ガヴィールは再び短く溜息を付く。

「ええ、帰ってきてすぐに副隊長に命じられましたので。遺族が判明したものをから順に、送り届けています」

「そうか」

ジェガンも、複雑な様子だ。

ダイルは、吸血鬼の襲撃を聞く度、ルテイル国から脱走する。

それは、被害者を遺族に送り届けるためだ。

少なくとも、一部でも。

ダイルは問題児だが、それはダイルの優しさによるものだ、大人たちは理解している。

しかし、それは遺族に、被害者の死を嫌でもつきつけることである。

ダイルの行為は、紙一重。

感謝する者もいれば、生きているかもしれないという希望を打ち碎かれ、暴言を吐く者もいる。

だからジェガン達は、それを褒めることも、責めることもできない。

脱走することは別として。

「それより、隊長。あの吸血鬼の対応はどうするんです？」

「まずは、ダイルのゴーグルを調べるしかないだろう」

それと、お前さんたちのも。

そのあとにあの映像は即刻破棄しなければな」

「そうですね。まあ、目下の問題は…」

「ザ格拉斯じゃな」

ガヴィールの言葉を取って、ジエガンはモニタを操作した。

それはガヴィールの意図する言葉ではなかったが、ジエガンの視線の先を見てそれもそうだ、とでもいう風に頷いた。

それは廊下をゆっくり歩くザ格拉斯と、彼に抱えられて出て行くダイルの映像記録だった。

そのダイルは、ザ格拉斯の背中に回した手を、こちらに向かって中指を立てて睨みつけていた。

「着きました」

僕の部屋のドアの前でザグラスは止まった。

僕は無言で抱きかかえられたままドアの横のボタンをいくつか押し、その上に取り付けてある指紋照合盤に乱暴に手を押し付けた。

「壊れますよ？」

ザグラスが注意する。

僕は、無視。

照合版の中の左右に伸びた光のラインが一本、上下に二往復し、電子音が鳴った。

ドアが右にスライドして開く。

僕を抱きかかえたザグラスはゆっくりと部屋に入る。

「相変わらず、掃除してませんね」

部屋中に脱ぎ捨てた衣服や靴、散らかった機器類を見て彼はそう言ったのだろう。

呆れた口調ではなく、単なる感想の様だった。

尤も、余計なお世話である。

僕はまた、無視。

「不機嫌ですね？どこに副隊長を降ろせばよろしいでしょうか？」

それくらいは、答えて下さい」

僕は顎でベッドを指した。

この国では誰も使っていないような、クラシカルなベッドだ。

この第三部隊本部で与えられた私室の他にも、これと同じ物が自宅にある。

ジェガンに我俣を言って特別に作ってもらったものだ。

クラシカルと言っても、僕にはそれが普通のベッドといえる物だ。パイプで作ったベッドで、上にはスプリングの入ったマット、化繊ではあるが、シーツと布団と枕で構成されている。

普通の人は、空調と温度管理を自動で行う、睡眠カプセルを使っているが、僕にとっては、これがベッド、寝具といえる物だ。

睡眠カプセルで寝るのは、僕はどうしても慣れない。

岩の上や、床で平気で寝る事のできる僕だけど、睡眠カプセルは、ダメだった。

ザグラスがその僕のお気に入りのベッドの端に僕を座らせるようにそっと下ろした。

「では、私は仕事がありますので」

兵隊独特な（気がする）節目節目を強調したお辞儀をしてザグラスは背を向ける。

「ザグラス。こちらを向け」

僕は命令した。

「はい」

ザグラスは直立不動で向き直る。

顔は緊張なんて縁のなさそうな、いつものどこか余裕のある表情。僕は人差し指を前からこちらにくいくい、と数回動かしてこちらへ来い、と合図する。

ザグラスは無言で近づく。

僕が座っていて視線を合わせるためか、ザグラスが片膝を付いて目の前に控えた。

そうするや否や、僕は彼の胸座を掴んで互いの鼻が当たるくらいまで乱暴に引き寄せた。

「どういっつもりだ」

僕はできるだけ低い声で言った。

「何が、でしょうか？」

細い目の奥で黒い瞳が笑んでいる。

「お前以外に、誰ができる？」

僕はゆっくり、しかし噛み付かんばかりの険しい顔をして言う。

「何を、でしょうか」

「しらばっくれるな。見たんだろう、あれを」

「はつきり、仰ってくださいませんか？」

僕はゆつくりと彼の胸座を放すと、無言で彼の頬を拳で殴った。

彼は僕から見て左によるめいて床に手を着いた。

大袈裟な。

大袈裟な。

僕は呆れた。

右手で、しかも座ったまま殴ったからそんなに痛くはない筈だ。そもそも、兵士がこの位でよろける訳がない。

僕は片目を細くしてザグラスを見下ろす。

「僕は、君にゴーグルをジェガンに内密でメンテナンスしろ、と言っただけだ。」

誰が、記録を見ていいなんて言った？

誰が、ジェガンやガヴィールに見た内容を話していいと言った？

答える、ザグラス「ファングル！」

最後の方は怒鳴っていた。

ザグラスは、元のように跪き、につこりと、口元だけで笑いやがった。

「ええ、誰も言っておりません。」

ですが、副隊長はガヴィールさんに内密でメンテナンスしろ、とは言っておりません。

それに、メンテナンスには記録のチェックも行なわなければなりません。

だから、私は副隊長のゴーグルの記録映像を見させて頂きました。ゴーグルの記録の削除の権限は、隊長と貴方にしかありません。

貴方はそれを怠った。

だから、末端職員の私が見てしまった。

これは、貴方のミスです。

そして、私は貴方の記録映像で気になる事をガヴィールさんに報告しました。

その情報をガヴィールさんがどうするかは、あの人の問題です。違いますか？」

殴られた痛みにも動じることなく、ザグラスはしれっとした顔で答える。

「屁理屈を言うな。」

それを見たなら、最初に僕に報告すべき事だろう」

「そんな、みすみすわかつている結果を辿ろうとする人間がいますか？」

「ああ、もう。お前と話していると腹が立つ」

僕は頭を掻き毟って吐き捨てるように言った。

怒っていたのは僕なのに、何故僕が責められなくちゃいけない？

イラつく僕に構わず、ザグラスは僕の横に立った。

「座つても？」

「勝手にすればいい」

僕は両手で頭を押さえて俯いたまま言った。

僕から横に、約五十センチほど離れてザグラスは座った。

スプリングの軋む音と、僅かな揺れ、僕よりも重たい体重が乗った事によってそちらに体が少し傾く。

ベッド以外に僕の部屋にまともに座る事の出来るスペースなんてないからだ。

ザグラスは真面目な顔を作る準備か、それとも頬が痛むのか、両手で顔を揉んだ。

「あれは、副隊長の胸中にだけ納めるべき事ではない事くらい、ご自身もわかつているのでしょうか？」

「だけど、君のやったことは完全な人権侵害だ。」

僕のプライベートだ。君が踏み込む事じゃない」

「あれは、貴方個人の問題ではありません。」

隊長どころか、隊全体、もしかしたらルティル国内に関する問題に発展しかねないと私は思います」

「あんなインテリジェントな吸血鬼を確認したからか？」

あれくらいの吸血鬼、まだ僕らが発見してないだけで本当はゴロゴロいるかもしれないってだけの事だろう」

「いいえ、違います。

今はまだ上層部にこの話はしていません。

今のところ知っているのは、隊長とガヴィールさんと私だけです。貴方のゴーグルの映像はおそらくすぐに隊長が破棄する事でしょう。

ですが、いつどこでこの話が漏れるかはわかりません。

またあの様な吸血鬼が副隊長とコンタクトを取りにくる可能性を考えるならば、噂になるのは必至と言えます。

そうなれば、副隊長の立場は非常に危うい物となります」

「副隊長の任を降ろされるとか？願ってもないよ」

フン、と鼻を鳴らす。

「わかつているのでしょうか？」

僕の顔を覗き込むように言ったザグラスは僅かに口元が笑っていた。

「…上層部に知れば、僕がスパイの嫌疑をかけられるとでも？」

「それだけですむと？」

「そこまでお目出度くない。僕だって少しは頭を使ってる」

「それは、失礼しました」

両手を肩の高さにまで持ち上げて“降参”か、“驚いた”と言った意味合いを表わすようなジェスチャをするザグラスを冷めた目で睨んでやった。

「では、これからの行動をどうすべきかもわかっていますね？」

「さあね」

ゆっくり確認するような口調を僕はぴしゃりと撥ね退けた。

「副隊長らしい答えですね」

ザグラスはクスクスと笑った。

しかし、その顔は少し腫れはじめていたせいか、妙に歪んでいた。それとも、捻くれ者、と思っているからか。

僕はザグラスに叩きつけようと思った様々な言葉を肺に溜め込んで、中の空気と混ぜ込んで原型を無くし、息と共に室内に放出した。



「もういい。仕事に戻れ」

僕は横目で命令した。

「そのつもりです」

ザ格拉斯は立ち上がり、さっきと同じように敬礼してから、部屋を出て行った。

ザグラスの言っていた事は、大袈裟な事ではなかった。

この国では、絶対の敵は吸血鬼だが、だからと言って人間の間で対立が無い訳がない。

それは、大きく分けて、ルテイル国に生まれ育った者と、そうでない者の対立。

ルテイル国に生まれ育っていない者とは、僕のように永緑壁外えいりよくへきの国からこの国へ逃げてきた者や、その子孫である。

僕はよく知らないけど、ジェガンが若い頃は、永緑壁外の人間に対するルテイル国出身の人間の迫害は酷いものだったと聞いた。

今はそれほどでもないらしいが、差別はしつかり残っている。

特に、上層部の頭の固い連中なんて、代表的だ。

表面上は国民平等を謳っているが、軍でも壁外に向かわせられるのは殆どが僕と似たような人間たち。

つまり、壁外出身者、もしくはその子孫、だ。

この事について、僕には特に不満はない。

問題なのは、そういった僕みたいな人々がクーデタを起こそうとしては、いまいかと上層部を筆頭とした人たちが疑っている事。

軍に所属する者はその殆どが壁外へ出る事を仕事―壁内出身者はこの国から出て、危険を被ることをとさら嫌がっている為、そのしわ寄せが壁外出身者らに回ってくるのだ―としている為に、壁外出身が、その子孫が多い。

その為、彼らはおそらくクーデタを起こされた場合、勝ち目がないという理由で、何かしらにつけて粗捜しをしては、世論を軍の大幅な権限剥奪に持って行こうとしている。

今回の事も、漏れれば大変な事になるだろう。

軍は、吸血鬼にルテイル国を売ろうとしている、とでも言つつも、りだろうと思う。

少しでも思考をする人間ならば、この安易な主張の矛盾点に気付くだろう。

だが、この国内で安穩と僕らの上にどっかりと座って暮らしている国民は、気付かないかもしれない。

世論は軍の排斥に動くかもしれないし、再び壁外者の迫害へと繋がっていくかもしれない。

ザグラスは、この可能性を心配しているのだと僕は思う。

彼も、壁外者だ。

彼の経歴を僕は知らないが、彼の過去に壁外者としての何らか苦痛があったのだろう。

彼は再びそれが来るのを恐れていると、僕は思う。

ザグラスは飄々とした仕草の奥で、笑みを湛える瞳の奥で、弱い自分を包み込んでいる感じだ。

ある意味とても正直で、大人だと思えて、羨ましいし、少しだけ、尊敬できる。

勝手な行動をした後の僕にガヴィールのお説教よりも堪える罰を与えてくれやがるのは玉に瑕だけだ。

そこまで思考を廻らせた時に、内線電話が鳴った。

内線電話は、不幸なことに、ベッドサイドのデスクから床へと飛ばされていた。

ベッドから降りてわざわざとるのが面倒だ。

緊急ならその内誰かが呼びに来るはずだから、無視しようかとも思ったが、あまりにしつこくコール音がするので、渋々ベットから転がり落ちる。

「どうした？」

僕はどうかこうにか匍匐前進で床に転がった電話まで行き、出る。

予想していたのはガヴィールとかジェガンあたりだったが、耳に入ってきたのは以外にも、可愛らしい少女の声だった。

「ダイル？私」

名乗りもしなかったが、僕にはそれが誰だかすぐにわかった。

「ここに掛けてきちゃいけないって言ってるだろう？」

僕は窘めるように言った。

相手には少々刺のある言い方に聞こえたようだ。

「あの、私、その…。ごめん」

声は感情がこもっておらず、無機質だったが、僕には相手の落ち込んだ様子が目に浮かぶ。

仕方なく、僕は優しい口調を意識しながら言葉を作る。

「どうしたの？一体」

「あのね、ダイルが言っていた時間より帰りが遅いから、その、どうしたのかわかって」

早口で電話の少女が言った。

早く要件を済ませて切った方が僕の機嫌を損ねないと判断したのかもしれない。

けれど、相変わらず無機質な声。

帰りが遅いと言われて、丁度そばに床に放置された時計を引き寄せる。

時刻は、二十二時をちょっと過ぎたくらい。

そっか、今日は二十時には帰るって言うておいたっけ。

そんな事を今頃、思い出す。

さて、どうするか。

今から帰ろうにも、僕は一人じゃちょっと、動けない。

ジェガンたちに頼もうにも、今頃徹夜で仕事だろう。

ふうむ。

状況的には今日はここに泊まるしかない。

でもなあ、心情的には家に帰りたい。

僕が長い間黙っているので少女は僕が怒ったと思ったみたいだ。

「仕事、忙しいんでしょう？」

もう、切ろうか？」

遠慮がちに言うてくる（様に僕には聞こえる）。

「あ、ああ、うん。

今日は帰れない。

明日、夕方にはそっちに帰るから。じゃあね」

結局、帰れない状況は変わらないと判断し、僕は彼女の返事を待

たずに切った。

切ったあとで、ちょっとそっけなかったかも、と反省した。

帰ったら彼女に謝らなきゃ。

また匍匐前進してベッドに戻るのは面倒だったので、僕はそのままそこに寝る事にした。

翌日、僕は関節の痛みによる目覚めの後、朝っぱらから目まぐるしく動き回った。

というのも、朝礼の十分前に起きちゃったものだから、ろくに風呂も入れないまま朝礼に参加し、その後、副隊長としての雑務をどっさり抱えて待ち構えている二人（「ガヴィーとジェガン」）を振り切るために痛い膝を引き摺りつつ建物中を逃げ回る羽目に陥った。

で、現在、十六時、無事逃げ切って帰宅完了。

というか、早退した。

もちろん、了解は副隊長である僕本人から取ってある。問題なし。

まっすぐ自室のベッドに向かい、どさりと体を預けた。

天井を仰いでいると、ひとりでに部屋の照明が付いた。

「おかえりなさい」

照明が灯るとともに、無機質な少女の声が聞こえた。

昨日の電話の少女だ。

けれど、声だけ。

姿は見えない。

「ただいま」

僕は急な眩しさに目を細めた。

「今日は、素敵なお土産があるよ」

僕が言つと、彼女は嬉しそうに―実際は無機質な声で―クスクス笑った。

「なあに？お人形？お洋服？それともお菓子？」

「それ、君に必要？」

「いいえ、いらないわ。少なくとも、今は」

「他の意見は？」

「特に思いつかない。答えは？」

「カルネア」

微かに、少女が息を呑んだ気がした。

僕は待つ。

「生きてたのね？」

ずいぶんと長い沈黙のあと、ようやく少女が言った。

僕も同じような思いだったから、わかる。

ようやく吐き出した彼女の言葉は震えていた（様に思えた）。

けれど、それは喜びに体を震わせているからだということを僕は知っている。

「生きてるかもしれない可能性が見えてきたっただけ」

そう言っただけ僕は、クバチとの会話を彼女に説明した。

「目的は何だと思う？」

話を終えて、改めて聞いてみた。

「少なくとも、貴方に会いたい、と言っているのはカルネアではなさそうね。」

それに、カルネアを連れて来るといふ言葉に信頼性があるとは思えない。

けれど、その、ク…何とか…」

「クバチ」

「そう、そのクバチとかいう吸血鬼が明らかに、私たちと彼女との関係を知ってる可能性はあると思う。」

けれど、その貴方に会いたいと言っている奴の目的が何なのかは、さっぱりわからないわ」

僕は大きく頷いた。

「僕も同意見。」

奴らが何を目的として僕に近づいたのか、何で僕らの関係を知っているのか、わからないんだ」

「それで、どうするの？」

「三日後云々のこと？」

「正確には後二日ね。行くの？行かないの？」

「どうするのが一番いいのかな……」

きっぱり断りの言葉を吐いた手前ではあるが、僕は口元に指を当てながら考え込む。

「貴方の安全を考えるなら、行かないほうがいい」

彼女が断言した。

「安全、ねえ」

元々、兵士の仕事が安全とはいいがたい、とは僕は言わなかった。

「何が待ち受けているかわからないのよ？」

壁外に出れば、いつ吸血鬼に襲われるかわからない。

それは、何が待ち受けているのかわからないと同義だ、とも僕は言わない。

「面白そうだから行きたいって言ったら？」

「止めはしないわ。」

ただし、私も行く」

「君が？」

ふふつと彼女は笑った。

「だって、私だって、カルネアに会いたいわ」

「本当に彼女かどうかかわからないって言ったのは君なのに」

「言ったが何よ？」

むつとした声（に聞こえた）。

僕は口を突き出して不満顔を作る。

昨日といい今日といい、何で僕が責められなきゃいけないのさ。

「可能性に賭けてもいいじゃない？」

どうせ、この国にいてもカルネアに会える可能性なんてゼロだもの。

初めての外出が、彼女に会いに行く、ってね」

多分姿が見えているなら腰に手を当ててウイंकしてそうだな、と僕は思った。



「でも、どうやって？」

僕はいいとしても、君はどうするの？」

僕の放った疑問に、彼女は朗らかに答えた。

「別に、行くのは本体じゃなくても問題ないでしょ？」

誰も、本体でなければいけないなんて、言わなかったんだから。

貴方も私も、ね」

「ふうん、そういうこと？」

「ええ、そういうこと」

僕らはニヤリと笑った。

少なくとも、僕はニヤリと笑った。

「なんだか、物寂しいっていうか、さびれたっていうか、そんな感じね」

「それ、同じ意味じゃないの？」

僕は辺りをきよろきよろと見渡す少女に苦笑いを漏らす。

彼女にとって、初めての壁外である。

ここまで来る間も、彼女は落ち着きなく辺りを観察している。

どんなに観察したところで、岩石群が変わるわけでもないのにね。それよりも、彼女が忙しなく視線を移すせいで僕の視界までぶれるから、そろそろ落ち着いてもらおうか。

「ここから、向こうに向かつてあと二・三時間つて所かな。

そこまで行くと、キンバリー国との国境。

こことは比べ物にならないくらい、緑の多い場所さ」

僕はルテイルとは反対方向を指しながら、彼女に説明する。

「場所：。ちゃんと、国として機能しているの？」

彼女は僕の示した方向を眺めて聞く。

僕の言葉の選び方が引かかったようだ。

僕は彼女の視線が一方方向を向いたおかげで視界が安定した。

「今のところはね」

僕は肩をすくめて、答えた。

僕は国政というものに興味がなから、彼女の言う国としての機能がどういう定義であるのかはわからなかったが、とりあえず、僕の中の基準では、おおむね機能していると評価していた。

実際の目で見ると、データで見るとは若干の差異があるかもしれないが、たぶん情報量としては彼女の方が国外のことに詳しいだろう。

僕たちは今、先日の吸血鬼、クバチがお迎えにきます、と言っていた地点からキンバリー方面に三キロほど通り過ぎた場所にいた。

なんでこの場所にしたか、特に意味はない。

彼女が喜んでいたら、もうちょっとだけ、もうちょっとだけ、とバイクを進めていたらこの場所に来てしまったに過ぎない。

「それで、この場所で合っているの？」

クバチとか言う吸血鬼の指定した待ち合わせ場所」

彼女はキンバリーについて興味をなくしたのか、視線を地面に向けて聞いた。

「さて、どうだろうね。」

実際、時間をきっちり指定された訳ではないし、この辺でいいかなって適当に来てみたんだけれど」

「アバウトね。」

出会えなかったらどうするつもりなのかしら」

「全く持って同感。」

あちらさんの考えることはわかんないね。

まあ、いくらこっちが待つにしても、夕方までにはルテイルに帰ろうか」

「そうね、長居するのも危ないしね。」

ばれるとしても、早くて夜中つてところだろうから、余裕はあるけれど」

「そんなに長い間誤魔化せるもの？」

「あら、私を見くびってもらっちゃ困るわ。」

「ばれると言っても、私が手抜きをしたら、の話」

「つてことは？」

「今片っ端から情報を塗り替えてるわ」

「頼りになるねえ」

「そのかわり、五体満足で帰してね？」

記録がなくても、残骸が残ったら調べられるわよ。

あなた、誤魔化せないでしょ？」

「ごもつとも」

僕はしっかりと頷く。

僕は胡坐をかいて座り、地面を見つめる。

強い風が吹くと、お情け程度に生えている草が揺れ、砂埃が沸き立つ。

それだけ。

風と、それが揺らして、吹き飛ばす物質のこすれる音だけ。

僕も彼女も、それをしばらく、黙って聞きいつていた。

そうしていると、カルネアに会えるという期待が大きくなって、気が緩みそうに困る。

もしカルネアの目の前で、カルネアと同族　クバチを斬らなくちゃいけないことになったらっていう可能性を考えて、少しだけ、困る。

うつかり、気が緩んで、躊躇しちやいそいだ。

「ところで、ダイル。ゴーグルに異常もしくは反応はある？」

そろそろ暇になったのか、彼女が口を開いた。

待つこと一時間。

未だにクバチが姿を現すことはない。

まあ、待ち合わせ場所ではないから仕方ないのかもしれない。

「特になし。といつても、あいつリーダーに引つかからないから無意味だよ」

「生体反応感知に切り替えてみてくれるかしら」

「ええ？意味くない？」

こちらに生息してる虫から動物から全部対象になるよ」

「それでいいの。そうね…五分ごとにデータをこちらに送ってくれるかしら。」

こちらに近づいてきている熱源が吸血鬼の可能性はあるでしょう？  
私が熱源の分類をしているから、貴方はデータ送信と肉眼での確認をお願いね」

「そんなに同時進行して負担にならない？」

僕は心配して言った。

僕の安全のために彼女が壊れてしまうのは、僕にとっては不本意だ。

「気にするなつていても、貴方は聞かないのでしょうね」

「当たり前。これ以上の働きを僕は君に求めていない」

「限界になったら泣き出すわよ。もうこんなことしたくないって」「どうやって？」

その疑問に彼女が答える前に、僕らを招待したやつが現れた。

クバチだ。

クバチを認識するよりも、僕と彼女の視線は彼が連れてきた吸血鬼に注がれた。

黒いフードを被った吸血鬼。

あれが、カルネアなのか。

食い入るように、その吸血鬼とカルネアとの共通点を探した。

けれど、その吸血鬼は目深なフードつきの、全身黒くてだぶついた服を着ていて、髪の一筋さえも見せておらず、辛うじて覗く口元でメスだろうと判断できるにとどまった。

僕にはその背格好や口元だけからカルネアかどうかを判断することができなかった。

記憶の彼女より、その吸血鬼は背が低いように思われからだ。

もっとも、僕らが幼い頃の記憶だから、そのときの身長差を考えると、可能性がないと言い切れない。

「どう思う？」

僕はクバチの連れている吸血鬼を見つめながら、彼女に聞いた。

「あれでは本人かわからないわね」

至極もつともな答えを彼女が言う。

彼女の方が、今は僕より冷静かもしれない。

「先日、ナクタルシート様の乗っていた乗り物と同じです」

僕と彼女が吸血鬼に見入っている間にクバチが僕のバイクを調べていた。

正確には、同じではなく、同じ型のバイクだ、と突っ込みたい気もするが、ぐつと我慢。

壊したのはクバチ達なんだから、同じものであるはずがないとわかってるだろうに。

「おそらくこの近くにいらっしゃるでしょう。」

私は探しにいきますが、貴方はどうしますか？」

クバチがフードの吸血鬼に向かっていった。

吸血鬼は顎を動かして、行け、という意味を示した。

クバチはそれに頷くと以前見たときのような素早さであったという間にいなくなった。

全身を布で覆った吸血鬼だけが、残される。

「話しかけてみたほうがいいかな」

僕の中でそれはもう決定していたが、一応、彼女に聞く。

「もう少し様子を見てもいいんじゃないかしら」

「どうして？」

「あの吸血鬼とクバチとの関係が不透明だから」

関係などどうでもいいことだと僕は思った。

僕らに重要なのは、あの吸血鬼が本物か、偽物かだけだ。

彼女の言葉を見無視して、話しかけようと僕は吸血鬼を見やる。

そこで僕は、驚きに体を一度だけ大きく震わせた。

件の吸血鬼が、僕らの目の前にいたからだ。

吸血鬼は、僕らのバイクを触っているようだ。

おもむろに、吸血鬼はフードを取り除いた。

僕は息をのんだ。

その顔は、間違いようもなく、僕らのカルネアだった。

彼女を見た瞬間、僕の頭の芯が、ぼうつとした。

あの日以来、求めてやまなかったまさにその存在が、手の届きそうな距離に、いる。

そのことに、瘡おじのように震えているのは、喜びのせいだけだと思いたかった。

少しだけ黄みを帯びた、ゆるいウェーブの白髪も、優しげな弧を描く髪と同色の眉も、潤んだ紅い瞳も、真っ白な肌も。

幼い記憶のまま。

老いることもなく。

少しも変わらず、僕らの養母はははそこに立っていた。

「間違いじゃ、ないよね」

僕の中で答えは決まっていたが、彼女に同意を求めた。

「少なくとも、外見は私たちのカルネアだと、思う…」

彼女はいまだ、確定的な言葉を示さない。

まったく、彼女は冷静・慎重だ。

彼女のおかげで、僕は苛立つどころか、熱くなった頭を冷やすことができる。

確かに、こんなうまい話があるわけない。

三年間、僕は探していたんだ。

僕が、兵士になってから、三年間。

兵士になれば、壁外へ頻繁に出られるから。

あの日から、生き別れてしまった養母を、三年間探した。

その期間が、長いのか、短いのか。

人によって違うだろう。

けれど、生きているのか、死んでいるのかもわからないカルネアを探すことは容易じゃなかったことだけは確かだ。

カルネアは吸血鬼だ。

単純に、各国を訪ねて捜したところで、街中で吸血鬼に出会えることはまずない。

各国はルテイル同様、街を永緑壁で覆うことで吸血鬼の襲来から身を守っているからだ。

つまり、吸血鬼のことを人間の中から聞き出そうとするには、壁外へ出る機会の多い、その国の兵士に聞くより他はない。

しかし、兵士にとって、吸血鬼は襲ってくる獣と同義だ。

殲滅する対象の個体差など、気にかける者などいなかった。

少なくとも、今までそんなことを気にする兵士に出会うことはなかった。



人から得られる情報は、ほとんど無かったんだ。

初めて壁外へ出て、吸血鬼に出会ったときは、吸血鬼のことは吸血鬼に聞いた方が早いと思った。

けれど、接触する吸血鬼はカルネアと同族であるのが疑わしい者ばかりだった。

対峙する吸血鬼たちは話しかけても、唸り声を上げるばかりで反応しない者が多く、言葉は理解している風な者もいたが、それらにしても、まともに対応する個体は皆無だった。

目の前の人を―僕を―食うこと。

それしか頭がない連中ばかりだった。

仕方なく、僕は自分が任務に就くときはもちろん、他の部隊が任務で被害にあった時も、現場に行って―被害者の遺体のサンプルリングという大義名分をかざしながら―カルネアの首が落ちていないかを確認するしかできない毎日だったのだ。

他国が被害にあったという情報を聞けば、できるだけそちらにも足を運んだ。

そうして、養母<sup>はは</sup>の首が落ちていないことに安心し、どこか知らないところで蛆の湧く生首になっているのでは、と嫌な思いに身震いし、カルネアがそんな簡単に殺されるはずがないと否定した。

それが、いきなり現れたクバチという名の、まともに対応できる吸血鬼に出会って、こんなにあっさりと、カルネアと思しき個体が現れたのだ。

そう、あまりにも、簡単に。

疑ってかかる彼女の方が、僕は正しいと思った。

そう、“外見”はカルネアに間違いなかった。けれど、“中身”まで、カルネアである確信を僕らは抱けずにした。

そういう実例を身近にしている僕らとしては、そういう疑いを抱けずにいらなかった。

この間にも、カルネアと思しき吸血鬼は、興味深げにバイクに触れている。

「ねえ」

僕は彼女に話しかける。

「…なあに？」

たぶん、彼女はもう僕の考えが分かっているからか、嫌そうに返事をした。

「攫えないかな。この吸血鬼をさ、ルテイル内に」

我ながら、物騒な発想だ。

念のため、と実行できる手段を用意したのは彼女だけだね。

だからこそ、嫌なんだろうな。

「一応聞くけど、門<sup>ゲート</sup>以外から吸血鬼を入れる方法に心当たりか？

永緑壁が、なぜ吸血鬼を阻むのか知らないわけじゃないでしょう？」

「それ以外の方法なんて、僕が思いつくわけじゃないか。

門<sup>ゲート</sup>を使えば、吸血鬼だって簡単に国内に入れる」

「思った通り、馬鹿なこと！！

映像は私が塗り替えられるとしても、肉眼は誤魔化せないのよ？？  
門<sup>ゲート</sup>を使えば沢山の目撃者ができる。」

あなたの権限で、第三部隊の門<sup>ゲート</sup>を使うことができて、上層部に

不要なエサを与えることに：ジエガン達に手が伸びることになるのよ。

それをわかった上で、あなたは言っているの？」

「もちろん、わかった上で言ってるよ。

けど、カルネアを見つける糸口なんだ。

みすみす逃してたまるものか。

もちろん、この吸血鬼が間違いなくカルネアであるとわかったなら、僕はカルネアと一緒にこの国を出て行くよ。

カルネアと一緒にいられるのなら、ルテイルにそれ以上留まる意味はないんだから。

そうだろう？

その時は、間違いなく、君も一緒に」

反対する彼女に対して、僕は最後の言葉を、殊更ゆっくりと言った。

彼女が沈黙する。

僕はさらに言葉を続けた。

「それにね。

それなりの理由で吸血鬼を国内に入れられる場所が、一つだけあるの、君、忘れてるじゃないか」

あ、という彼女の小さな声。

「「マッド・マディの研究所」」

僕らは声をそろえた。

「決まりだね」

僕は今度こそ彼女の答えを待たずに、音声スイッチを入れた。

「あまり触らないでもらえるかな？」

くすぐったくてたまないんだけど」

僕は軽くジョーク。

突然喋り出したバイクに、カルネア（仮）が驚いて手を引っ込めた。

吸血鬼は少しだけ距離を置くように後ずさる。

「生き物だったの？」

吸血鬼は驚きながらも確認してきた。

ああ、声も記憶の中のカルネアにそっくりだ。

ドキドキしちゃうね。

「残念ながら。」

君が見ているのは、ただの乗り物。

僕はルテイル国内からこの乗り物につけた音を伝える道具を介して君と話している。

音だけじゃなく、君の顔だって、僕には見えているよ」

そう、僕らはクバチ達に会いに行かなかった。

厳密には、僕ら自身は。

バイクを遠隔操作して、送られてくる映像や音声を僕と彼女は、部屋でのんびりと見聞きしていた。

これは、彼女のアイデア。

これなら、もし騙されていようと、被害は最悪バイクだけで済む、というわけ。

ちなみに、無人バイクが目撃されたところで、問題にはならない。  
物資輸送の先見に使用されることがあるからだ。

まあ、ここみたいに、ルート外でバイクの残骸が見つかったら問題だけど。

「ナクトルシート？あなたなの？」

吸血鬼は眉をひそめて問うてきた。  
理解が早くて助かる。

「それも残念ながら、違うね。」

僕はウエンドイル「デューター」。

ダイルって呼んで。

君が、クバチが言っていたカルネア？」

「ええ、そうよ。あなたはどこにいるの？」

答えながら吸血鬼が周りを見渡した。

「付近を探しても、僕を見つけないよ。」

僕は今遠くにいる。

君は、僕に会いたい？」

吸血鬼は、逡巡したようだった。

「あなたの姿が見たいわ」

僕はにこりと笑った。

まあ、相手には見えてないけど。

「OK。じゃあ、そこにじっとして」

言うが早いか、僕はとあるスイッチを押した。

「！！??」

バイクから飛び出した網が、吸血鬼を捕えた。  
あつけない。

網の中でもかく吸血鬼。

手で引き裂こうとしているけれど、早々ちぎれるような代物じゃないはず。

吸血鬼の力を考えれば時間の問題かもしれないけれどね。

しかしまあ、簡単に捕まってくれたものだ。

「こりゃあ、偽物の可能性が高いね」

僕は少しだけ落胆した。

「じゃあ、逃がす？」

沈黙を守っていた彼女が問う。

「御冗談。お持ち帰りは決定事項だよ」

すでにバイクは発進していた。

バイクは吸血鬼入りの網を引きずって、ルテイルへと進路をとる。網の中では吸血鬼が変わらずもがいているのか、うめく声が聞こえる。

バイクの後方を映すカメラはないので、確認はできない。

摩擦と吸血鬼の腕力で網が破けないことを祈る。

「ダイル、あなたって…」

カルネアかもしれないっていうのにこの扱いはないと思うんだけど」

自分が用意したくせに、彼女の呆れた（様な）声。

「こんなにあつさり捕まらなかつたら、もつと丁重に扱ってたよ」

養母はこんなものに捕まるほど鈍くはない。

それに、僕は優しい人間でもない。

「クバチ！！」

どこにいろの！？」

引きずられながら、吸血鬼が叫ぶ。

「カルネア！？」

クバチの声がしたが、後方にいるのだろう、彼の姿は見えなかった。

おそらく追いかけているのだろうけれど。

いくらクバチが足が速かろうと、バイクに追いつくことはできない。

残念だったね。

カルネア（仮）はもらっていくよ。

「さて、じゃあ、マッド・マディのところに行ってくるよ。

あの吸血鬼が到着する前に話をしとかないと。

あとのこと、頼むね」

僕は外に出るために上着をクローゼットから取り出した。

当然、相棒も腰に下げる。

「聞きそびれてたけれど、あなた、マッド・マディと面識あったの？？」

「ん？ほぼないけど、それが？」

僕は上着に袖を通しながら、きょとんと聞き返す。

「面識ないのに、すぐに会えるはずないでしょう…。」

マッド（狂った）なんて言われてるけど、あれでも一つの研究所を所有できるほどの人なんでしょうに」

「あー、大丈夫大丈夫。

問題ない。

彼はジェガン崇拝者なんだよ」

僕は手をひらひらと振って答える。

「ってことは…」

「ジェガンの子供である僕を思いつきり嫌ってる。嫉妬だね。

じゃ、行ってきます」

「不安だわ…」

彼女の眩きを背に、僕は部屋を出た。

だからこそ、すぐに会えるっていうのに、彼女は心配性だ。



## 25（後書き）

ここにきて、主人公の正式名ができました。

主人公の名前は、「ウェンダイル」デューター」です。

そのうち登場人物一覧（多少のネタばれあり）を投稿するつもりです。

ルテイル国内には、街を囲んでいる永緑壁内に更に永緑壁で覆う施設がいくつかある。

マッド・マディが研究所長を務めるここ、国立吸血鬼生態研究所はその中の一つである。

その上、珍しいことにこの研究所は国境も兼ねる、永緑壁に隣接して建てられている。

他の研究所はというと、永緑壁で覆われた街の中心に建てられているのだが、この研究室だけ、ぽつりと永緑壁に隣接されている。

理由は簡単。

研究内容が吸血鬼の生態であるからだ。

吸血鬼の生態を調べるために創設されたここは、定期的に数体の吸血鬼の首なし死骸が運び込まれ、日々吸血鬼対策のための研究がなされている。

そして、極稀ではあるのだけれど、生きたまま上手く半殺しにされー捕獲された吸血鬼が運ばれてくることがある。

そういった吸血鬼は死骸ではわからないことの調査や、生体実験に使用される。

当然、永緑壁内に生きた吸血鬼を運び込むことは、同じ部屋に猛獣と同居することに等しい。

そのため、万が一吸血鬼が逃げ出した時の保険として、街内から遠い国境ー永緑壁付近に隣接されたうえ、研究所の周りをさらに永緑壁で覆っている。

永緑壁は、未だに謎の解明されない光物質だが、どういいうわけか、吸血鬼がその光にさらされると、脳が溶ける。

他の生物には一切影響がない。

まさに、吸血鬼から国を、人を守る“壁”となるのだ。

故に、研究所から逃げだせたとしても、吸血鬼が国内で暴れることはない。

研究所の人間に被害が出るとしても、まず研究所を覆う永緑壁によつて吸血鬼は死んでしまう。

まあ、永緑壁を遮断するために設置された装置――門<sup>ゲート</sup>を使われたら、僕ら兵士の出番になるんだけど、門を使用するなんて頭を働かせる吸血鬼はいないという前提。

ほら、吸血鬼って　クバチみたいなのは希少な例外だが　頭使わないヤツばかりだから。

クバチらの例を考えると、こちら甘っちょろいけどね。

僕はその研究所の受付ーといっても、内線がぼつんと台に置かれているだけの狭い空間ーに立っていた。

ぐるりとその空間を見渡して、監視カメラがないこと　不用心だ　を確認した後、内線で所長室へとコンタクトをとった。

コール音がいくらも鳴らないうちに、繋がる。

「こちらは、所長室でございます。アポイントメントはございますか？」

ない場合は、事務室へとお問い合わせの上、手続きを行ってください」

事務的な男性の声がした。

たぶん、秘書か何かだろう。

「アポイントメントはないんだけど、マディに第三部隊のデューターが来たって言うてくれる？」

その方が話が早いから」

「少々お待ちください」

一分も待たず、再び男の声が案内した。

「では、左のドアへどうぞ。案内の者が待機しております」

左のドアが左右に分かれてスライドした。

「こちらへ」

出迎えたのは、女性。

にこりともしないし、服装は白衣だ。

研究所員で間違いないだろう。

研究物を運び込む兵士以外には、所員しか出入りすることがないのでこんなものなんだろう。

女性に案内されたドアのプレートには“所長室”と書かれている。女性はドア横の電子版を操作し、中と連絡をとった。

「デューターさんをお連れしました」

すぐにドアが開く。

中から人が飛び出してきた。

「ああ、ジエガン!!!」

自ら会いに来てくれるなんて、嬉しいわ!!!」

その人物は、僕に抱きつくこうとして、寸前で止まる。

その顔が、見る見るうちに不快さへと歪んでいく。

「どうして“七光り”の方がいるんだ!!!」

怒鳴った声も体つきも、間違はなく男、だった。

目の前には、ボサボサの髪、鍛え上げた兵士を見慣れた僕からすれば軟弱そうな体つきに、青黒いクマの目立つ色白の、白衣を着た男が一人。

「僕も、デューターに間違いはないんだけど？」

僕は小首を傾げて目の前の人物に向かってにこりと笑った。

不愉快気に、その人物ーマッド・マディは絡まって鳥の巣状になった髪をさらに掻き毟った。

ああ、更にかわいそうな頭になってる。

「クッソ！！てめえだつてわかつてたら研究所から放り出してやったのに！！！」

何で言わねえんだ、あんの馬鹿秘書！！！」

どっちか聞かない君も君だよ。

「今からでも遅くはないと思うけど、僕を放り出したら、後悔するのは君だよ？」

マッド・マディ。

ねえ、聞いてる??」

「おれの名前はマディじゃねえ！！ロバートだ！！！」

忌々しげにマディが吐き捨てる。

こいつ、話聞いてないな。

「マディアスでしょう？本名は」

とりあえず、落ち着くまで乗ってあげよう。

「マディはマッドと音が似てるから嫌いなんだ！！！」

「つか、おれはMADじゃねえ！！」

他が嫌がる仕事を引き受けてやってるんだ！！！」

もともと体力がないのか、ひとしきり怒鳴ってハアハアと息をつ

くマディ 改めロバート。

見た目通り軟弱だな。

「…それより、てめえなんかによ用はない。

おれは忙しいんだ。放り出される前に出ていけ」

呼吸が落ち着いたころ、ロバートが低い声で告げる。

「いや、僕は用があるから来たんだけど」

やつと、こつちの話ができるかな??

「七光りの用事など、聞いてやらん。

おれはお前が嫌いだ、以上。

こいつを放り出せ」

最後の言葉は、今まで人形のように黙って事の次第を見守っていた女性に向けてのモノだった。

っていうか、放り出される前に、とか言いながら放り出す気満々じゃないか。

女性に力負けするような僕ではないけれど、危害を加えるのは確実に僕の方だから、おとなしくした方がいいかなあ？

でも、後悔するのはロバートの方だろうから、一応、女性に促されながらも言ってみた。

「いいの？」

今、イイ具合に生<sup>ナマ</sup>の吸血鬼を運んでる所なんだけど、いらないの？  
いらないんなら、放しちゃうように連絡するけど」

途端、ガシリと肩を掴まれた。

ひ弱な体のどこにそんな力があるんだ、ロバート。

「ゆつくりと相互理解を深めようじゃないか、なあ、七光り」

中年オヤジのキラキラした瞳は正直気持ち悪い。

その目をマッドと言わずして、何と形容すべきなのか、と僕は思った。

## 登場人物（27話までの登場人物）（前書き）

多少ではありますが、まだ出てきていない設定も書いてありますので、嫌いな方は読まないでください。



## 登場人物（27話までの登場人物）

（ ）内の名称は基本的にニックネーム、年齢は初登場時の年齢です。

### <ルテイル国>

・ウエンダイル（ダイル、ナクタルシータ）≡デューター（14）  
本編の主人公。

ルテイル国軍第三部隊副隊長。

実年齢に似合わないほど大人びた思考と誰に対してもドでかい態度を持つ皮肉屋。

特定の人間と吸血鬼以外には基本的にドライ。

吸血鬼カルネアに育てられていたが、8歳の時に他の吸血鬼に襲われ、兄弟を失う。

養母であるカルネアは不在だったため、生き別れたと本人は考えている。

ダイルだけが、左の肘から下部分を奪われながらも逃げのび、ジエガンに保護される。

その時の記憶は曖昧。

その後、ジエガンの子供として育てられる。

“ナクタルシータ”は自分の名前であると認識しているが、“彼女”以外の他者に対してそれを認めることはない。

・ジエイガンデイル（ジエガン）≡デューター（61）

ダイルの保護者。

ルテイル国軍第三部隊隊長。

国でも屈指の科学者としても有名。

ダイルの左腕を与えたのもこの人。

自称、おちやめなジジイ。

ダイルの皮肉屋な性格はこの人の影響を大いに受けていると言っている。

ダイル曰く、親バカではなくバカ親なジジイ。

・ガヴィール（ガヴィー）＝ベイト（36）

ルテイル国軍第三部隊副隊長補佐官その1。

ダイルの第2の保護者的存在。

好き勝手な行動をするダイルに振り回されている。

年少者のダイルを上司と認めるおおらかな性格である。

基本的に人がいい。それ故に苦勞人。

恐妻家らしい。

・ザグラス（ザック）＝ファンゲル（24）

ルテイル国軍第3部隊副隊長補佐官その2。

えいりよくへき  
永緑壁外出身者。

ガヴィールとともにダイルに振り回されている…様に見えて、それを楽しんでいる節あり。

笑顔で嫌みや皮肉やあてこすりをダイルにさらりと言う。

たぶん腹黒。

科学者の卵でもあり、ジェガンの研究を手伝っている。

ダイルのある意味協力者。

・彼女（？）

ダイルの自宅部屋に住んで（？）いる、声だけの住人。  
姿を見せたことはない。

声は平坦で感情はないが、ダイルは何となく彼女の心の機微を読み取っている。

ネットワークや情報処理（主に隠ぺい工作）が得意。  
ダイルとともにカルネアを探している。

ダイルのよき理解者であり、唯一隠し事をしない相手。

- ・ロバート（本当はマディアス）＝ゾーイ（43）  
通称、マッド・マディ。

国立吸血鬼生態研究所所長。

ルテイル屈指の科学者であるジェガンを敬愛するが、その子供であるというだけで色々と優遇されているダイルが嫌い。

というか、常にジェガンの周りにいられるダイルに嫉妬している。むしろ自分を養子にしてほしい。

研究者としては優秀だが、没頭する姿と執着具合は周りをドン引きさせるくらい異常。

本名が嫌いらしく、ロバートと名乗っている。

#### <吸血鬼>

- ・カルネア  
ダイルたち兄弟の養母<sup>はは</sup>。

ダイルたちが襲われた時以来、消息不明となっている。

- ・クバチ

ダイルの前に現れた、物腰優雅な吸血鬼。

ダイルのことを“ナクタルシータ”と呼ぶ。

カルネアとダイルたちとのつながりを知っているらしい。

## 登場人物（27話までの登場人物）（後書き）

とりあえず、マディアスが登場するところまできたので、登場人物紹介をば。

また、再編集作業終了のため、24 27話は新たな話が追加されています。

マディアスは27話に登場しています。

「それで、その吸血鬼は今どんな状態なんだ？」

所長室のソファで僕とロバートは二人きりで向き合った。

お茶なんて出さないとこが、嫌われてるなあって感じだね。気にしないけど。

「今、僕の軍では無人探査にいろいろな機能を搭載する試験をやってるんだ。

で、今回のバイクには捕獲網を搭載しててね。

まあ、一回目で捕獲に成功しちゃったもんだから、どうしようかってことになってさ。

丁度いいから、君の所に搬入しようってことで、僕が来たわけ。一応、網の強度が不確定だから、ここに来るまでに網が破けるって可能性もある。

正直、確実にここに搬入できると確約はできない。けど、ほぼ無傷の吸血鬼だよ」

僕はデタラメを交えつつ説明する。

「大変魅力的な実験材料の提供に感謝する、とジェガンに伝えてくれ。

が、それは、ちょっとどころじゃなく、危険じゃないか？」

ロバートが心配するのはわかる。

普通、半殺しの吸血鬼は半殺し直後に兵士によって専用の拘束具を付けてから研究所に引き渡されることになっている。

しかし、今回の吸血鬼は生け捕りのため、そのような拘束具をつ

けぬまま門ゲートをくぐることとなる。

そうすると、研究所員自ら、吸血鬼に拘束具をつけねばならなくなるのではないか、とロバートは言っているのだ。

所員たちが被害にあうことは間違いない。

「だから、僕が来たんじゃないか。

ただ搬入の旨を連絡するくらいなら、通信で十分だよ。

拘束具、付けれる人間いないでしょ？

搬入する前に取り付けてあげる」

「ふむ、それならば、一応受け入れる用意をしておこう。

ただし、網が破れて逃がしたならともかく、拘束具をつけようとして取り逃がしたら、二度とこの研究所に立ち入ることは許さんかな。

瀕死状態にもするなよ」

「難しいこと言うなあ。

できるだけ、腕をもちだりはしないよう気をつけるけどさあ。

とりあえず、拘束具頂戴よ。

あと、僕これ、休日出勤で、装備忘れちゃったから貸して。

上手くいけば、あと30分くらいで国境…研究所の門ゲートから1メートルと離れてないけどさ、一番近い門ゲートに到着するよう設定してるから」

僕は今、戦闘服ではなく、私服だ。

相棒は腰に下げているけどね。

「はあ！！！？？

30分だと！？

急すぎるだろう！！！」

言いながらロバートは内線に手を伸ばし、次々と指示を飛ばし始めた。

「急だったから、僕も装備できなかったんだよ」

僕だって、吸血鬼を捕まえる予定はなかったんだ。

念のためにと彼女が用意した捕獲網を、まさか使うとは思ってなかったからね。

## 28 (後書き)

お待たせしました!!!

実は作者、交通事故にあい（トラックにぶつかられ）まして、しばらく休養しておりました。

ペースは落ちますが、少しずつ、続きができ次第UPしていきます。



研究所に戦闘服等の装備はない、とロバートに突っぱねられた僕は、仕方なく大急ぎで本部の私室に向かい、装備を整えた。

誰にも見つからなかったのは、ラッキー。

それにしても、装備くらい置いとかないと、あの研究所危ないよ。いつ必要になるか分かんない危ないことしてるくせに。

ま、自宅に装備を置いていない僕も僕だけど。

僕は研究所に戻りながら、ゴーグルを使って彼女に連絡をとる。すぐに対応した彼女は、後部を映すカメラがないから確実とは言えないが、音声から分析して、まだ吸血鬼はバイクに引きずられているようだ、と報告した。

意外と、捕獲網は丈夫だったみたい。

ついでに、彼女に第三部隊本部とその付近で捉えられた僕の映像の消去を頼んだ。

ザックならともかく、ジェガンやガヴィーに見つかるとうるさい。

「手負いの獣はなんとやら、よ」

彼女が言うので、僕は軽口をたたいた。

「手負いの獣よりも、たちが悪いに決まってる。

僕の無事を祈ってね」

大サービスで、投げキッスもつけてから、通信を切った。

研究所で拘束具を受け取り、門前<sup>ゲート</sup>で待機する。

吸血鬼が来るまでに、ストレッチをして体をほぐしておく。

うん、膝の調子もいい。

相棒のバッテリーも充電したばかりだし、準備万端。

時計を確認するまでもなく、遠くに土煙が肉眼で確認できた。もうすぐだ。

研究所の門から見学しているロバートを含めた、数名の所員に手を振る。

ロバート以外の誰もが、緊張でこわばった顔をして、誰も応えてくれない。

見世物じゃないってのに、これだけサービスしてるんだからさ、応えてくれればいいのに。

ノリが悪いなあ。

もっとも、ロバートにしても、興味は吸血鬼だけみたいで、やってくる土煙に瞳をキラキラを通りこしてギラギラと輝かせて、一心不乱に見つめていた。

やっぱり君は、マッド・マディだよ。

これまで、僕が彼に会ったのは三回。

初めて会ったとき、僕の横にジェガンがいなくなった途端、彼は初対面の僕に嫌いだの、親の七光りだのといって、嫉妬で濁った瞳で睨みつけたことを思い出す。

今回も、僕だとわかった途端、すごい拒否を示した。

それなのに、吸血鬼を提供するという話になるや、きちんと僕の話聞いてこうとする。

ほんとに、研究が好きなんだねえ。

研究のためなら、大嫌いな僕の話でもちゃんと聞くんだから。

僕は一人微笑みながら、装備と拘束具を最終点検し、ゴーグルを嵌めて戦闘モードに切り替えた。

相棒を鞘から抜くと、刀身の代わりにレーザー・サーベルが輝く。

相棒が輝くと同時に、僕は思考も、切り替える。

さあ、僕とどんなダンスをしてくれる？

楽しみだね、カルネア（仮）。

バイクが、土煙をあげてやってくる。

その後ろには、網に捕獲された吸血鬼がいるはず。

僕はバイクの輪郭がぼんやりと肉眼で確認できる距離になると、リモコンでバイクを止め、そちらに向かって、ジャンプ・ブーツを使って駆け出した。

あまり、永緑壁に近づけなくなかったからだ。

すっかりそちらに突き飛ばしてしまえば、吸血鬼は簡単に死んでしまう。

今回の目的は、本物にしろ偽物にしろ、生け捕りだ。

そんな事態は御免だった。

近づく間に、網がブチブチとちぎれる様が確認できた。

ちゃんと中にいたことがわかって、むしろ安心。

けど、ああ、これで網の上から拘束具をつけるっていうのは無理になった。

一番傷つけずに捕獲できる手だったんだけどな。

つまり、拘束具をつけてから網をレーザ・サーベルで切っちゃうのが手っ取り早いんだよね。

まあ、僕としてはダンスを踊る気満々だったから、これでもいいんだけど。

ゆらりと立ち上がる、吸血鬼。

先手必勝とばかりに、僕は切りかかった。

すでに僕を見つけていたのか、吸血鬼は僕の第一撃をすんでのとこでかわしてくれた。

僕は一度、距離をとって様子をうかがう。

記憶のままの養母の姿が、映像で見るより眩しい。

思わず、ゴーグルの下で目を細めた。

けれど、まだ確信が持てないうちは、これは、ただの吸血鬼。そう、ただの吸血鬼。

自分に言い聞かせないと、気が緩みそうだ。

体は戦闘モードなのに、心が集中できていないのに気づく。

ほらほら、気を抜くなよ、僕。

油断していると、喰われる…かな？わかんないや。

対峙する僕を、茫然と眺めた吸血鬼は、やがてやんわりと、微笑んだ。

「やっぱり、ナクタルシート、じゃないの」

マイクを通すよりも鮮烈な、養母ははの声に、僕は少しだけ、戸惑ったがぐつと腹に力を込めて耐えた。

「は…….はじめまして、カルネア。

僕が、さっきの主。

ウェンダイル…ダイル…デューター。よろしくね」

言いながら、僕はレーザー・サーベルを両手で持ち、左下に構えたまま、吸血鬼に迫る。

狙うは右腕。

吸血鬼は大きく宙返りをしながら後ろへ飛んだ。

僕のレーザー・サーベルは空振り。

着地よりも少し遅れて、ゆるいウェーブの髪がふわりと落ちた。

おっと、なるべく無傷、だった。

足の腱を狙う方がいいかな？

あ、でも足くらいなら、切り落としてもいいかな？

考えながらも、体は吸血鬼の胴を、首を、腕を、そして足を狙って攻撃を繰り返す。

致命傷にならない程度に、加減はする。

「ナクタルシート？」

どうして、そんなことを言うの？」

「ちゃんと、顔を見せて。

その、顔を覆ってるものをもって」

「私の顔を、その目で見て。

懐かしい、あなたのその目を、私に見せて。

あなたの、綺麗な、青く光る、黒い瞳を」

「あなたの瞳の色、とても大好きよ。

あなたのその髪も、あのころと同じね。

あのころより、少しだけ長くなっちゃってるけど、変わってなくて嬉しいわ」

「ねえ、何か言っちゃおうだい。

私のこと、忘れてしまったの？」

私の、かわいい、ナクタルシート。

私と一緒に来て頂戴。

そうすれば、絶対、思い出すはずよ」

吸血鬼は、僕の一撃ごとに、それをふわりとした動作でよけながら、優しく話しかける。

僕は、動揺なんてしていない、つもりだったけどガタガタだ。

数回の攻撃で、それを自覚する。

クバチなんかより断然遅い動きで、攻撃をしても来ない吸血鬼に――太刀も当てられないなんて、本当に異常事態。

だって、今ゴーグルに覆われている、僕の目は、吸血鬼の言う通り、青く光る黒、なのだ。

### 30（後書き）

お待たせしました!!!

もう30話だというのにあまり話が進んでませんね；

次回からはもうちょっとお話長めにして話が進むようにしていきますと思います。

また、お話を長くする分、推敲時間や誤字脱字等確認が幾分おろそかになるかと思っています。

もし、誤字脱字等、ありましたら教えてください。

他にも、これって辻褄あってる？といった矛盾点などがありましたら、遠慮なく教えてください。

よろしく願います。

もちろん、感想もお待ちしてます!!!

ゴーグルは、相手側からみると、鏡面になっている作りだ。つまり、ゴーグルをつけていない時の姿を知らない限り、目の色など知る由もない。

僕は今回、この吸血鬼と接触する前から　最初から　ゴーグルをつけていた。

クバチと対した時だって、ゴーグルで目は隠れていたから、わかるはずが、ない。

なのに。

それを、当ててきた。

背筋がぞわりとした。

本物？偽物？どっち？

単純な僕の思考回路は、都合のいい方を支持しようとし、彼女の冷静な声を思い出して、打ち消す。

幸い、体はきちんと攻撃を止めない。

あっさりとよけられてはいるけれど。

これって、幸い？

「おい、何を手間取ってるんだ、七光り」

イヤフォンから、不機嫌な声が流れた。

ロバートだ。

距離が結構あるから、あちらからどれだけのことが見えているのかはわからないが、いつまでも帰ってこない僕に、業を煮やしたのだろう。

その言葉を理解した瞬間、僕はすごいショックを受けた。



手間取ってる？誰が？冗談だろう？

他人からさえ、そんな風に見えるなんて、まったく、僕って、苦笑い。

よくよく考えれば、あの時、クバチは僕を観察していたはずだ。ゴーストを外したところも見ていたに違いない。

それを、この吸血鬼は聞かされているって可能性が高い。

もしくは、彼らがあらかじめ、ナクタルシータの外見を知っているってことかもしれないし。

とりあえず、現実に引き戻してくれた、ロバート、君に感謝、かな。

「ねえ、カルネア。

ずっと気になってたんだけどさ、ナクタルシータってそんなに僕に似てるの？

そいつって一体なんなのさ？」

僕は構えたまま、立ち止まり、尋ねる。

とっさに思いついて。

そうなんだ。

ナクタルシータが何なのか、カルネアは知っている。

僕らと、カルネアだけが、知っていること。

いくら、僕らとカルネアの関係を知っているっていても、クバチや偽者がこれを知っているとは思えない。

カルネアなら、迷わず、満足のいく答えをくれる。

吸血鬼は変わらず、やわらかく微笑んで、両手を広げて、前に差し出す。

まるで、この胸に飛び込んできて、と言っているみたいだった。

「似てるも何も、あなたが、ナクトルシート。私の唯一。私のすべて。私の愛し子」

その瞬間、僕の頭はすっきりとした。

うん、こいつは偽物だ。

これは、確実。

はやくこうやって確かめればよかったよ。

僕って、ほんとに頭の回転悪いなあ。

人のこと、笑ってられないよ。

カルネアに関して、僕は本当に盲目になってしまっ

危ない傾向だ。

気を、引き締めないと。

僕はちよっとした賭けをしようと思った。

こいつは、僕をどこかに連れていく為の、エサとして連れてこられた。

僕を襲うことが目的じゃない。

だったら、ね。

僕はレーザー・サーベルの電源を切り、吸血鬼の胸に飛び込んだ。

やわらかく、僕を抱きしめる吸血鬼。

カルネアそっくりな顔の、白い頬を、うつすらと朱に染めた、歓喜の表情が飛び込む直前に見えた。

「ああ、わかってくれたの？

久しぶりね、ナクトルシート。

あなたが生きているって聞いた時の、私の喜びがわかる？

本当に、あなたが生きていてくれて、嬉・しい・わ？」

僕は、突き飛ばすように、吸血鬼から飛びのいた。

「あのさ、言っただしょ。」

僕は、ダイルっていうの。

ナクタルシータなんて、長つたらしい名前じゃない。理解できる？」

僕はわざと、呆れたように溜息をつく。

ウエンダイルも長つたらしいと言われたら反論できないけどね。まあ、ダイルって名乗る方が多いから、問題ないでしょ？

吸血鬼の腹には、拘束具、の一部。

一見ベルトのような、金属でできた、腹部を覆うリング。一つでも、拘束具のパーツをつければ、こっちのものだ。

不思議そうにそれを撫で、そして、僕を見る吸血鬼。

そこには、こういう反応が正しいのか、判断しかねて困惑する顔が。

「僕からのプレゼントだよ」

僕は口元だけで笑って見せ、つられたように吸血鬼はほほ笑みを形作ろうとした瞬間、固まった。

マヌケ。

演技もほどほどにしないと、ねえ。

演技のためとはいえ、警戒心持たなきゃだめだよ。

腹に装着された拘束具から何本もの、メタリックな光沢をもった帯が伸び、吸血鬼の腕を、足を捕えていた。

一瞬で、両手足を自身の体に強制的に密着させられている。

身じろぎした吸血鬼はバランスを崩して倒れ、先ほどの網と同じように力で引きちぎろうとしているのか、みしみしと帯がきしむ。僕はすかさず残りの拘束具のパーツを首に、両手首に、両足首に装着。

同時に帯を解除。

吸血鬼の体　首、手首、足首、腹　に六つのリングが取り付けられた。

確か、拘束具が完全に取り付けられると、内側から針が出て、薬が注入されるって話。

どんな薬だか知らないけど、捕えられた吸血鬼は体に力が入らなくなるようだ。

持続時間は、個体によって多少ぶれがあるけど、約3日、だったかな??

この薬、量産できたらもつと僕らの仕事が助かるんだけど、吸血鬼一匹に効き目のある量を作るのに、それはもうすごい時間がかかるんだとかで、なかなか手に入れることはできない。

だからこそ、生きたまま捕獲される吸血鬼って貴重なんだよ。

どうして今回、急遽であるはずなのに用意できたかって??

この薬の開発者って、ロバートなんだよ。

開発者のところだから、ストックがあって、当然。そうじゃない?

完全に拘束具が取り付けられた吸血鬼はすでに薬が効いたのか、弱弱しく体をうごめかすが、それだけ。

それだけしか、動けない状態となった。

何が起こってるのか理解したのか、吸血鬼は顔を歪め、低く、小さく、唸り声を出している。

カルネアじゃないとわかった僕に、遠慮や、容赦なんて言葉はないよ？

同じ顔で、そういうことされると、癪に障るから、やめてくれな  
いかなあ？

心の中でそう言い、僕はバイクに拘束具をつけた吸血鬼をバイク  
の後部座席に腹ばいになるように乗せ、ロープで固定。

ちゃんと座らせて、2ケツにしてもいいんだけど、満足に動けな  
いのに、姿勢を保つことなんてできないだろうし。

吸血鬼に後をとられるなんて、気分良くないし。

はみ出した足は地面でこすれちゃうだろうけど、それは仕方ない  
よね。

「捕獲完了。

今からそちらに帰還する。

準備はできてるの？？」

僕はゴーグルでロバートに連絡を入れる。

「遅えよ。

誰に物を言ってる。

お前が手間取ってる間に余裕で終わってるてえの。  
さっさとそのお宝をもつて来い。

無傷で、だからな」

ブツリと一方的に、通信を切られた。  
はいはい。

じゃあ、バイクの速度はゆっくりめ、だね。

### 31（後書き）

お待たせしました。

とりあえず、今までの約2倍の文字数でのUPです。

これでもう少し話がスムーズに進めばいいのですが……

ダイル曰く、カルネアは偽物だったみたいです。

捕獲は完了しましたが、これからどういう展開にすべきか、まだ考え中です。

なので次話UPまで時間がかかりそうな気がします。  
がんばりますので、しばらくお待ちください。

また、誤字脱字報告や感想等、お待ちしております。

さっさと持つて来い、なんていわれたけど、僕はゆっくりとした速度でバイクを発進させた。

ロバートの言葉に反発したわけじゃない。  
その逆。

例の薬の副作用でね、吸血鬼の再生能力が格段に落ちるんだ。だから、網に入れていた時と同じ速度でバイクを走らせたりしたら、このバイクからはみ出した足が、この吸血鬼の服と同じく網に入っている間に、吸血鬼の服は摩擦で所々擦り切れていた、ボロ雑巾みたいになっちゃうってわけ。

それじゃあ、貴重な情報源が台無しでしょ。

上手くロバートに言って、情報を引き出さなきゃいけないんだから、期待通りの吸血鬼を持つていかなきゃね。

門にたどりつくと、永緑壁の内側で、いつの間にか待機していた研究所員が門を解除してくれた。

門は内側からしか開かない仕組みになってる。

けどね、僕ら人間に永緑壁は影響しないから、門を使わなくても入れる。

壁、なんて名前が付いてるけど、僕らにしてみれば、単なる緑色の光だからね。

だから、わざわざ開けてくれなくっても、僕一人が内側に入って解除すればいいんだよ。

それほどの手間じゃない。

うーん、この研究員なりに労ってくれたってことなんだろうなあ。ありがとうね、お兄さん。

僕は軽く手をあげて礼を示し、国境の門を通過後、そこからメートルと離れていない研究所の門を、やはり開けてくれた研究員に礼を示しつつ、くぐった。

目の前には、ロバート。

僕はゆっくりとバイクを降りて、ゴーグルを外す。  
軽く頭を振って、顔にかかった髪をかきあげた。

「戦闘人形ってーのは、単なる噂だったか？」

ロバートが皮肉気に笑う。

僕はきよとんと首をかしげる。

「どういう意味？」

「たかが吸血鬼一匹に、存外、手間取ってたな。

噂じゃあ、二十匹の吸血鬼に一人で囲まれようが、平気で一匹残さず首を刎るって話だったが」

「二十匹は言いすぎでしょ。

噂にまわりついた背びれ尾ひれが豪華なこと。

手間取ってたのは、ロバートが無傷で言うからじゃないか。

すつごく難しい注文したの、君だってわかってる？」

僕はなんてことない、といった風に装った。

これはポーズ。

自分の気持ちに引きずられ、無様なダンスを踊ってしまったのは僕の失態。

けど、気にしてるなんて、気付かれない。

みっともないでしょ。

「ふん、まあ、これだけ状態のいい吸血鬼が手に入ってたんだ。

存分に使わせてもらう」

ロバートはどことなくうれしそうだった。

嫌みがこれくらいで済んだってことは、上機嫌な証拠だろうな。

そう言っている間にも、拘束具をつけられた吸血鬼は研究員たちの手によってバイクから外され、担架で運ばれていく。

僕はそれを横目でちらりと見やって、それから、ロバートに視線を戻す。



「それについてジェガンから伝言」

耳を貸せ、と言うジェスチャのつもりで、僕は口の端に片手を当てながら、自分の耳を指さす。

一瞬、ものすごく嫌そうに顔をしかめたロバートだったが、ジェガンの名前に負けたのか、僕の身長に合わせるように腰を屈めた。

僕はロバートの耳に口を寄せる。

ロバートは一瞬、寄ってきた僕から逃げる素振りをしたが、それ以降は動ず、じっと僕が話すのを待つ。

やれやれ、耳の穴に息を吹きかけたわけでもないのに。

敏感なのかな？

「あの吸血鬼でどうしても調べたいことがあるから、手伝ってくれてさ。」

ちよつと、面白い情報モが手に入るかもしれないんだ」

僕は、敏感な耳のロバートの為に、言い終わるとすぐに離れ、にい、と笑った。

ロバートの目が、興味深げにギラついた。

「話の内容によっては、協力してやらんこともない」

とかいいながら、ジェガンの頼みならロバートは絶対に断らないことを、僕は知っている。

「絶対君の役に立つ、かもね」

僕とロバートは、吸血鬼を運び込んだ研究室へと向かった。

## 32 (後書き)

短いですが、切りがいいのでUPします。

研究室内に入って一番最初に目についたのは、正面に設置された大きなガラス窓と、操作盤だった。

ガラス窓の向こうを覗くと、床がこちら側よりも低く 約1メートルくらいかなあ？ なっていて、機械類がひしめきあった部屋だ。捕えた吸血鬼はその部屋の中央に置かれた椅子に寝かされていた。先日、僕が左手を修理していた時のモノと似たような椅子。

僕との違いは、拘束具の上から、ベルトで固定されていること。

あとは、天井から吊るされた、いくつかのアーム。

研究室内にはすでに2人の研究員 1人はさっき門を開けてくれたお兄さん が待機していて、僕がこの部屋の説明を求めると、お兄さんが、嬉々として話してくれた。

不思議なことに、ロボットがそれを止めることはなかった。

吸血鬼は、投与された薬で緩慢な動きしかできなくとも、椅子から転げ落ちるくらいならできる。

ベルトは、それを防ぐため。

怪我なんてされちゃ、大事な実験体なのにもつたいないってところだろうね。

また、実験・処置などを直接人間が行った場合、薬の効力が万が一切れた時に、吸血鬼に襲われる危険性がある。

アームは、それを防ぐために、部屋内の機械の操作を行う、人工の手だという説明。

アームの操作は、こちら側にある操作盤で行える、らしい。

僕はその操作盤の使用方法までは聞かなかった。

どうせ、覚える気がない。

「それで、何を提供してくれるんだ？」

一通り研究員が説明してくれたあと、ロバートが言った。  
操作盤の前に置かれた椅子に足を組んで座ったロバート。

僕は、室内にいるロバートの他、2名の研究員を見やって、洗面を作る。

「この設備の説明をしてくれた彼らには感謝しているのだけれど、人払いしてくれる？」

これは、ジェガンの意向もあることだから」

と言えば、研究員を蹴りつける勢いで、ロバートは2名の研究員をドアの外へと追いやった。

恐るべし、ジェガン効果。

そしてごめんね、門のお兄さん。

「はつきり言うと、確約はできない。

ただ、あの吸血鬼、今までの吸血鬼とは一味違うようだ、っていうのが、僕らの意見」

僕はガラス窓に背を向け、操作盤に寄りかかった。

どという風に話を持っていこうかと、考え考え、ゆっくりと話す。

「一味違う、というのは？」

少し、目を眇めてロバートが問う。

「バイクのモニタで確認した限り、今までの吸血鬼より、ずっとインテリジェンスなんだ。

まず、言葉を正しく使える。

会話ができるんだ。ちゃんと。

言語による意思疎通が可能ってこと。

あとは、所作。

獣染みた感じが見受けられなかった。  
なんていうのかなあ。

僕の言葉で言えば、今までの吸血鬼より、はるかに人間くさいって感じかな」

珍しくない？とロバートの顔をうかがえば、目が、いや、顔が、ものすごく、気持ち悪かった。

ギラギラしてるのに、少年みたいに澄んだ好奇心に溢れてる…んだけど、それがはめ込まれてるのは中年のおっさんで。

違和感バリバリで、気っ色悪い。

ちよつと鳥肌立つちゃったよ。

想像していた以上に、思いつきり食い付きがいい。

こっちが引きそうだ。

「会話が成立できる、だと!？」

それは、確かに貴重だ。

面白い研究が色々できそうだな。

ならば、まずは…」

一人でブツブツと小さな声で独り言を言い始める。

完全に、一人の世界に没頭中。

ええつと、こっちとの会話に引き戻さなきゃ、僕の計画が台無しかも。

僕は、なにやら、一人の世界に没頭し始めたロバートをこちらとのコミュニケーションの場に引き戻そうと試みた。

「…で、ジェガンが言うにはね？」

ジェガンの、名前だけでピクリ、と耳が動いたような気がした。ほんと、すごい効果なこと。

こちらにビタリ、と視線を向けてきたので、話を続ける。

「この吸血鬼の、記憶をしてみるのはどうだろうって。

どうして、そういう風に育ったのかが、わかるでしょう？」

直接聞くのは、薬を使っている限り、難しい、でしょ」

僕はゆっくりと、言葉を、ロバートの耳に染み入るように聞かせ

る。

その意味を、彼はきつと理解する。

これは、確信。

「お前、何を言っている？」

ロバートの顔が一変した。

ギリツと睨まれる。

そこに映るのは、嫉妬か、憤りか。

知ったことではないね。

「とぼけなくてもいいよ。

ジェガンからの指示を受けた時点で、アレの存在は聞いているんだから」

僕が含みを持たせてほほ笑むと、ロバートの顔は一層、陰しくなる。

「アレとは？」

「それってさ、生態研究者が、言う言葉じゃないね。

それに、僕は、それでも、ジェガンの子供、なんだよ？

どうして、僕が直接、しかも、たった一人で来たのか、この意味、わからないわけじゃない。

「でしよう??」

ロバートの顔を、じつくりと覗き込んだ。

研究者としての、ギラつくほどの好奇心など、今の瞳には伺えない。

そこにあるのは、燃えるような、黒い感情。

僕という存在に対する、苛立ち、かな。

ジェガンは、国の内外を問わず、有名人だ。

ルテイル国軍の第三部隊隊長っていうこともあるけど、それ以上に、科学者として有名だ。

ジェガンはいろんなことを手広くやっているけれど、主な研究は医療器具と武器開発。

たとえば、僕の義手。

腕や足を失った兵士が戦闘に復帰できるほどの性能をもった義手や義足を開発したのは、ジェガンだ。

他にも、武器や防具の性能を飛躍的に向上させたのも、ジェガン。ジェガンのおかげで、被害にあう兵士の数がずいぶん減ったんだそう。

その武器開発にあたって、吸血鬼の生態を調べることは欠かせない。

そのため、ジェガンは昔、第三部隊隊長と、この研究所の所長を兼任していたらしい。

それは僕がこの国に来るずっと前の話。

2つも肩書を持っていたんじゃない、体がいくつあっても足りないとかいって 本当は自分の研究が自由にできないのが嫌になってやめちゃったんだとか。

それも、僕が来るずっと前の話。

今では、ジェガンはザグラス一人を助手にして、研究を行っている。

たぶん、ジェガンがここの所長をしていたころにはすでにロバートもこの研究所の所員だったんだろう。

カリスマ的な所長がいなくなったことも、ジェガンの研究に関われないこともショックだったに違いない。

そんな敬愛するジェガンの研究室に出入りができる数少ない人間今のところ、僕とガヴィーとザックだけの1人が、何一つ理解できない子供である僕なのが、許せないんだろう。

まあ、僕とガヴィーは自由には出入りできないんだけど、ロバートは知らないようだ。

もしそれを知っていたとしても、ジェガンの研究を理解できる自分は許されず、拾ってきた子供はOKなのが納得できないってところかな。

### 33（後書き）

お待たせしましたー。

誤字脱字・感想等、何かありましたら報告お願いします!!



「M・REPRエムリプロッドODのことさえ、ジェガンは…お前に何の価値がある」

ようやく、唸るように絞り出された、悪意の言葉。

そんなことより、僕はロバートがその機械の存在を認めたことに、内心ガッツポーズ。

へえ、M・REPRエムリプロッドODっていうんだ？

僕は、名称こそ知らないが、そういったことのできる機械があることは、知っていた。

だって僕、危うく被験者にされそうだったんだもの。

自分の親ながら、そんな恐ろしいものの被験者に我が子を使おうとするなんて、怖いよね、まったく。

ロバートのいう価値云々というなら、僕はある意味価値があるのかもしれないけれど、それはとてもロバートが考えているであろうモノでは決していない。

ところで、M・REPRエムリプロッドODという機械 というより設備といった方がいいかな は、僕が知っている限り、この国にわずか2台だけ存在する。

それが、ジェガンの地下研究室と、ジェガンが所長をやっていた、此処。

ジェガンのところに持つて行くのは色んな意味で危険。

そういったこともあって、此処以上にこの吸血鬼を持ち込むのに、ぴったりの場所はなかったんだよね。

「どうする？やる？やらない？」

やるなら、僕は立会人として同席するけれど。

やらないなら、インテリジェンスだということは内密に。

何するのかは知ったことじゃないけどさ、普段やってる吸血鬼の研究になら使用してもいい。

それができないというのなら、すぐに僕が切って捨てる。

ああ、もし疑われるような研究を行うようだったら、ジエガンだつて黙っちゃいない。

OK？」

僕は首を傾げて尋ねる。

「おれは、ジエガンにたてつく気など、ない。

彼が望むのなら、それは未来への確実な糧の足掛かりだ」

敬愛してやまぬ人物のために、軽蔑してやまぬ人間の言葉を聞く。それがどんな、屈辱なのか。

彼の顔が、奇妙に歪んで、同意した。

少なくとも、僕はその言葉を同意の言葉と受け取った。

「では、ロバート」ゾーイ博士、始めていたきたいのだけれど？」

「ここにその設備はない。

場所を変える。

あの吸血鬼は、お前が運べ」

ロバートは低い声で言う。と椅子から立ち上がり、吸血鬼のいる部屋へと通じるドアを開ける。

僕に否やはないので、ロバートの後ろに続いた。

僕の力で吸血鬼1人を運ぶのは難しいので、何とか車椅子に乗せロバートは手伝ってくれなかった。落ちないように固定した。

そしてロバートがいるはずの方向を見ると、彼のすぐ傍の、壁だった部分に穴が開いていた。

いや、この場合、穴というのは適切じゃない。

ぽつかりと空いている様は穴だけれど、これは入り口、だ。

「何コレ。隠し扉とかベタすぎない？」

思わず笑ってしまいそうなのをこらえる。

「M-REPRODは簡単に非人道的行為を可能にする。

そうそう誰かに使われでもしたら大変なことくらい、アホなお前でもわかるだろ。

この研究所でその存在を知っている奴は俺だけだ。

：俺だけに、ジェガンが教えてくれたのに」

最後の言葉は、ロバートとしては小さな呟きのつもりだったんだろうけど、ばつちり聞こえてしまった。

ああ、ほんとにジェガンが好きなんだなあ、と思って、聞こえないふりをしてあげた。

「そうだね、嚴重に管理されてしかるべき代物なのは認めるよ」

僕がそうコメントするのを合図に、ロバートは入り口内へと入っていく。

僕が車椅子の吸血鬼と一緒にそれに続くと、自動的に入り口が閉まった。

入口から先は、それほど歩くことがなかった。

上下左右、足元灯以外何もない通路を幾分も行かないうちに、ドアが一つ。

ロバートは、その横に取り付けられた指紋認証盤に手をあてた後、暗証コードを入力した。

ドアが左右にスライドすると、そこに現れるのは、狭い空間。

人が15人も入ったらギュウギュウだろうなあ、と思われるその空間の正体は、エレベータだ。

中に入ると、慣れた圧迫感とともに、下降している感じがする。

今までおとなしく、身じろぎすらしなかった吸血鬼は、慣れない感覚だったのだろう、一瞬体を震わせていた。

「どうして、秘密の施設って地下に作りたがるのかなあ？」

僕はロバートに話しかける。

「すぐに閉鎖できるからだ」

無視されると思っていたのに、意外にもロバートは答えてくれた。結構面倒見いいよね、君って。

けど、言われた意味がよくわからなくて、首をかしげる。

「部外者の侵入があつた場合に、天井が崩落したらどうする？」

ロバートに言われた言葉に、僕は眉をしかめた。

「そういうことだ」

ちらりと眺めやった僕の表情に、理解したと判断したのか、ロバートはそれ以上何もいわなかった。

エレベータはまだ下降を続けている。

体感的に、かなりの距離を下降した感じがあるのにもかかわらず、だ。

エレベータの速度と乗ってからの時間を考えると、おそらく200mは下降したことになるんじゃないかなあ？

ジェガンの地下研究室も、これと変わりなく、かなり地下につくられている。

当たり前だ。

発案者が同じなのだから。

要するに、不都合が起きた場合に施設ごと埋めてしまえばいい、ってことだろう。

深度の深い場所につくれば、例えば地上が陥没したとしても、施設が地上に現れることはないだろう。

なんというか、大胆な発想だ。

様々な憶測が、僕の頭に浮かんでは、霧散する。

まったく、ぞっとするね。

我が親ながら、ジェガンは怖い、と改めて思った矢先、エレベータは停止した。

### 34（後書き）

おまたせしました。  
よろしければ、感想ください。

エレベータのドアが開いた瞬間、僕は逃げ出したくなった。  
というのも、部屋に先客がいたのだ。

それも、3人も。

先客は、僕がよく見知った人間たち。

ジェガン・ガヴィール・ザグラスだった。

あー、もう。

終わった。

僕の計画、台無し。

っていうか、穴だらけだったってことだ。

なんてことだろう、情けない。

半ばやけくそで、心の中で僕はお手上げという感じに万歳をした。

「それじゃあ、始めるかのう」

ジェガンの言葉にはっとしたときには、握りしめていた車椅子の  
取っ手をロバートに奪われていた。

「副隊長はこちらへ」

呆けた状態の僕はガヴィーに促されるまま、用意された椅子に座  
らされる。

「おとなしくしててくださいね」

ガヴィーは優しく頭を撫でるけど、ちっとも嬉しくない。

吸血鬼を見れば、ザックとロバートによって車椅子から降ろされ、

M エム・リフ・ロッド REPRORD にかげられるところだった。

「…最初っから、僕は監視されていたの？」

吸血鬼の記憶が、強制的に読み取られ始める。

僕はM・REPRORDを体験したわけじゃないからわからないけ

れど、痛いのかなあ？

吸血鬼が体を何度も痙攣させているのを、僕は投げやりな気持ちで眺めていた。

「そうです」

僕の右側に立っているガヴィーが、きっぱりと答える。

ジェガン・ザック・ロバートの三人は、M・REPRODの操作や、強制的に引き出された記憶の整理に忙しそうだ。

「もっとも、我々が警戒していたのは、あなたが国外へ外出することでしたがね」

「で、僕が動いたから、後をつけたってところ？」

「目的地が、吸血鬼生態研究所だとは思いませんでしたが」  
ガヴィー自ら、僕をつけたってことか。

どうりで、第3部隊本部で、誰にも会わなかったわけだ。  
すべては、彼らの仕業。

国外に出る者は、必ず装備を身につけていく。  
そうじゃないと、吸血鬼に襲われた時にひとたまりもないからだ。  
僕は自分の装備を本部にしか置いていない。

必然的に、国外に行くなら僕は本部に一度寄らざるを得ないってこと。

ってことは、僕を泳がせるために、わざと本部は人払いがされて  
いたってことだ。

自分の至らなさに、舌打ち。

こんなことなら、自宅にも装備を置いておくんだった。

いや、自宅から動いた時点ではばれてたから、それも意味ないか。

「優秀だよ、ガヴィーって」

「ありがとうございます」

皮肉なだけ。いや、それがわかったの反応か。

「で？どうして先回りできたのかな？」

「ゾーイ博士から隊長に問い合わせがきたそうで」

「…僕が装備をとりに行っている間、かな？」

ガヴィーは頷くことでそれを認めた。

僕はロバートを忌々しげに睨んだが、ロバートは作業に集中して  
いて気付かない。

いきなり訪ねてきた僕の言葉だけじゃあ、真偽がわからないから、  
ジェガンに問い合わせたといったところか。

マッド・マディなんて言われてても、そこは常識的な大人だった  
か。

いや、違うな。そこに思いたらない僕が子供ってこと。

ジェガンのことだから、僕の考えを簡単に見抜いたに違いない。  
じゃなければ、ここにいるはずがない。

ロバートにも協力を要請して。

ロバートがジェガンに協力しないわけがない。

内心、舌打ち。

まんまと騙された。

君は立派な役者だよ、ロバート。

さあて、どうしたものか。

次の手は、すでに決まっているのだけれど、それは僕自身がどう  
こう出来ることではないんだよね。

実行に移してもらっていいんだけどさ、問題は僕がどういう風に  
言い逃れできるか、だなあ。

「副隊長。

なぜ、件の吸血鬼との接触するでもなく、別の吸血鬼を捕獲して  
きたのですか??」

考え事していると、ガヴィーがもつともなことを聞いてきた。  
そう。君は僕の尋問係ってことなんだね。

「クバチとは接触したよ。

たまたま捕まえることができたのはこっちの吸血鬼だっただけ」  
下手なウソをつくのは適当ではないと判断して、僕は客観的事実



を口にする。

「クバチとはどんなやりとりを？」

どうして、別の吸血鬼を捕えなければいけなかったんですか？」

「クバチと接触はしたけれど、会話は一切なかったよ。」

なにせ、無人バイクを使ったからね。

クバチはバイクを見つけてすぐ、その辺に僕がいなか探しに行  
っちゃったし。

その吸血鬼はその場に残ったから近づいた瞬間に丁度いいから  
捕まえた。

捕まえた理由…、ねえ？

ほら、君も前言ってたじゃないか。

何で自分のことを知っているのか、どういった目的があるのか、  
じっくり尋問したいって。

僕もそれには賛成だ。

彼らが僕をナクタルシートと呼ぶ理由とか、知りたかった」

「副隊長、それはM - R E P R O Dを使用してまで知りたいことな  
んですか？」

「だって、捕まえるのには、あの薬が必要じゃないか。

そうしたら、口の筋肉だって緩慢になるんだから、まともに喋れ  
なくなるでしょう？」

それだったら、その装置を使って記憶を引き出した方が早いじ  
ゃないか。

違う？」

「確かに、記憶を引き出す方が、下手な尋問を行うよりも早いかも  
しれません。」

しかし、なぜあの吸血鬼がクバチと同様だと判断したんですか？  
通常の吸血鬼かもしれないでしょう」

「少しだけ話した。

僕に会いたいかって聞いたなら、僕の姿が見たいって言うから、

捕獲して僕に会いに来てもらったんだ」

「…副隊長。ザグラスがクギを刺していたはずです。

どうして、わざわざ自分からコンタクトをとるような真似を？」

「純粹な興味。

何をしてくれるのか、何を見せてくれるのか、何を聞かせてくれるのか、気になったから」

「カルネア、という名の吸血鬼が関わっていたからでは？」

僕はその名前に思わず目を見開いて、ガヴィーを凝視してしまっ  
た。

そしてすぐに心の中で舌打ち。

また、失態だ。

ガヴィーは吸血鬼に目を向け、尋ねた。

「あれが、カルネアですか？」

僕は沈黙を守る。

口を開くと、また失態を犯しそうな気がしたからだ。

あれは、カルネアじゃない。

けれど、カルネアへの手がかりだ。

あれは、あの吸血鬼の記憶は、僕だけのモノ。

ジェガン達には、渡さない。

さて、どうやって彼らを出し抜くかな？

### 35（後書き）

遅くなりました；

大人たちの方が一枚も二枚も上手でした。  
けど、ダイヤはまだまだ粘ります。

感想等、お待ちします！！

### 36 (前書き)

短いです。

「隊長の話によると、少なくとも半日は時間がかかるようです。どうしますか？」

吸血鬼の記憶の読み取り作業が始まってから15分ほどたった頃、ガヴィーが沈黙を守る僕に話しかけてきた。

「どうするってー？」

まさにどうするか、考えているところだけど、邪魔しないでくれる？

そう思ったけれど、口にはしない。

投げやりに応えながら見上げてきた僕に、ガヴィーはアゴヒゲを撫でながら苦笑いする。

応えてくれただけ、先ほどの沈黙よりはましだとも思っているんだろうな。

「このままここにいてもするのではないからっていう気遣いなも食いませんか??」

我々にや、結果が出るまで手が出せない領域ですしねえ」  
「ご飯ねえ。」

僕がこのままここにいてもすることはないからっていう気遣いなのか。

それとも、僕との気まずい雰囲気を変えたいってところだろうか。一番可能性があるとしたら、ここにいられては困るってことかな。さあて、どれかなあ??

「食べるのはいいんだけどさ、気になることがいくつかあるなあ」  
優しい僕は、彼の気遣いに応えることにしてあげた。

「気になること、ですか」  
首を傾げるガヴィー。

「僕はここに来る際、ロバートの指紋と暗証番号が必要だった。

出ていくのにそれが必要ないとしても、もう一度ここに戻るのには、それが必要でしょう？

「どうやってここに帰るつもり？」

「それなら、問題ありませんよ。」

読み取られた情報は隊長たちが本部へ持ち帰るはずですよ。

「ここに帰る必要はありません」

選別されて、問題のない情報だけ僕に公開するってことかな。

「あ、そうなの？」

「じゃあいいや。で？どこで何を食べるの？？」

「言っておくけど、ガヴィーの手料理なんて食べたくないからね？」

僕は意外なほどあっさりとガヴィーの提案を了承してあげることにした。

まあ、この場にはいない方が僕にとっても都合がいいし、ガヴィーが証人になってくれるのなら、なおのこと、好都合だ。

「いやいやいや、アンタ俺の料理食ったことないでしょうが。」

「それでも、“意外と食える”ってリタには好評なんですけど！？」

立ち上がって先ほど乗ったエレベータにさっさと向かう僕にガヴィーがすぐに追いつきながら訴える。

「ちなみに、リタとはガヴィーのパートナーのことだ。」

「え、本当に手料理喰わせる気なの！？」

「まさか。俺の手料理はリタ専用です！！」  
「惚気か。」

エレベータ内でも、ガヴィーの惚気を含んだ不毛な会話は続いた。

### 36（後書き）

お待たせした割に短くてすいません…  
今後の展開がまだ未定のため、ちよつと次話も時間がかかりそうです。。  
気長にお待ちいただけると幸いです。

コツコツコツ、と僕は皿の端をフォークで叩いて訴えるけれど、ガヴィーは黙々と食事を続けている。

我ながら行儀が悪いとは思っけれど、頬杖についてジトリとガヴィーを見つめる。

コツコツコツ、としつこく同じことを続けていると、耐えきれなくなつたのか、ガヴィーが口を開いた。

「何か、言いたいことが？」

「ああ、耳が遠くなっちゃたかと思ったよ」

「誰がだコラ。まだまだ若いわ、ピチピチの40代目前だコラ」  
ジトリとにらんでくる、ガヴィー。

「ピチピチとかキモいわおっさん。四捨五入で40のくせに。」

僕なんか四捨五入したらまだ10歳だ。

僕みたいなのをピチピチというんだおっさん」

「単なる子供じゃねえかガキ。肌なんぞアンタだって歳とりや衰えるんだ、ガキ。」

本題はなんだ、ガキ」

ケンカ腰で言葉を放してみると、期待通りにケンカ腰で答えてくれるガヴィー。

なんてーか、律儀だな。

「これ、寒気がするくらいまずいんだけど。」

誘つたからには美味しいもの食べさせてくれると期待したのに、がっかり通り越して残念だよ」

「残念って何だ、残念って。」

あんだ、オレの安月給把握してるだろうが。

旨いもん食いたきゃ、給料上げるよ上司」

「いやいやいや、そういうことはジェガンに言いなよ。」

僕に君の給料底上げする権限ないし。



それに、残業代でいくらか多く稼いでるでしょう？

ほら、僕のおかげで」

「ソーデスネー。副隊長の逃亡癖のお陰でデスクワーク溜まる一方ですもんネー？」

「お前は……たく、表に出るや、喧嘩なら高く買ってやる」

「事実ですよ。あと、現金前払い以外は受け付けませんよ？」

「……ザグラス。なぜおまえが答える？」

うんざりした目でガヴィーは隣に座る同僚を見た。

そこには、これ以上事態を引つかき回すな、という思いが込められているに違いない。

ちなみに、ソーデスネー、の辺りからがザグラスのセリフである。

例の吸血鬼の捕獲から、1週間が経っていた。

その後、特に僕の生活に変化はない。

変化がない、ということが僕にとっては問題だった。

まず、この一週間、壁外へ出て行く機会が2回。

その時にクバチもしくは関係のありそうな吸血鬼からの接触は全くなかった。

これに関しては、まあ、それほどということでもない。

むしろ、あっちも慎重になったかなと思うくらいだ。

僕にとって、一番の問題は、ジェガンらの態度。

ガヴィーと食事をして本部に戻って仕事 僕の大好きなデスクワークをここぞとばかりにガヴィー監視下でやらされた 行ってきた。から半日後、ジェガンとザツクは本部に戻ってきた。

僕の執務室に来た彼らは、渋い面持ちで僕に告げた。

“記憶が消えた”と。

以下、僕の回想。

「なーに？記憶喪失宣言？」

意味がわからず、僕は首を傾げて聞き返した。

「ちがうわい。ワシの記憶力なめんなこのガキ」

ジェガンがムツスリとした顔のまま、執務室のソファに腰を預けた。

よっころしよ、と爺くさい掛け声とともに。

「ジジイの記憶力なんぞ、たがが知れてるでしょう？」

だいたい、主語つけないから相互理解できないんだよ。

ちゃんと伝える気、あるの？」

「例の吸血鬼の記憶ですよ。」

データが、消失しちゃったんです。ごっそりと」

ジェガンは疲れているのか、それ以上何もいわない。

その代わりに、応えたのはザグラスだ。

「何それ？操作ミスでデリートしちゃったってこと？」

エム・リフ・ロッド

「違います。M - R E P R O Dで読み取った記憶がデータ化して記録装置に転送されるネットワーク段階で消えたんです。」

調べてみたところ、読み取った記憶がデータ化されると同時に消えてしまっんです」

「原因は？」

社交辞令で聞いてみただけだったけど、聞いたところで後悔した。不明ですが、予測としては、と前口上の後に続いたザックの話は、はつきりいつてちんぷんかんぷんだ。

機械のことを説明されたところでよく理解できない僕は、首を傾げるばかりである。

「よーするに、記憶装置に取り込んだはずのデータがないんだよ」

それくらいならわかるだろ、と面倒くさそうにジェガンが言う。

「えーと、考えられる原因を是正してもう一度記憶を取り込めばいいんじゃないの？」

「無理だな」

それに対してジェガンはきっぱりと応えた。

理由を聞けば、簡単だった。

例の吸血鬼が、死んだからだ。

原因は、M・REPRODの負担だという、僕にとっては納得し  
かねるものだった。

### 37 (後書き)

遅くなりました… ; ;

ほんと、そんな理由納得できないと思わない？

人間よりも何倍も丈夫な吸血鬼で、そんなことになるのなら、人間にあの機械を使ったらどうなることやら、おかしい話でしょ。

人間に使うことを前提にして作られたんだから、それはありえない。

記憶をとってしまえば、あとはどうなっても構わない、なんて非効率的すぎる。

そもそも、そんなものをジェガンが作る訳ないし、作ったとしても実動を可、にする訳がない。

僕の考えとしては、原因はM・REPRODじゃない。

何か殺さなきゃいけない理由が、もしくは状況があつたんじゃないかなあ。

それか、死んだことにしなきゃいけなかった、か。

ジェガン達は何がしたいのかわからないけれど、僕はそれ以上追及するのは後回しにした。

だって、僕が欲しいものは手に入ったし。

例の吸血鬼から得た記憶は今、僕の手元にある。

僕の優秀な“彼女”が研究所のネットワークに侵入して根こそぎ奪ったからだ。

彼女曰く、追跡できないどころか、痕跡さえ残さないよう徹底して侵入した、らしい。

彼女の仕事なら、ジェガン達にはそれがなぜ消えたのかさえ分かっていないと思う。

実際、ザックも小難しいことを言っていたけど、原因不明だと言っていたし。

ばれることはあまり心配していない。

僕は小声で罵りあっている お前もつと言いつてもんがあるだろうとか、あなたが甘やかすからこんな生意気に日々増長するんですとか、子供の教育方針で意見を交わす熟年夫婦みたいな会話を展開している 部下二人をちらりと見てから立ち上がった。

突然立ち上がった僕に彼らは疑問の視線を送る。

「ガヴィー、ごちそうさま。

僕もう行くよ。

これ、食べ残してもいいなら食べちゃって。

じゃあ、お疲れ様」

僕はヒラリと手を振って部下二人を店に残し、出て行った。

せっかく御馳走してもらっておいでなんだけども、最悪塩くらい使おうよ、っていうくらい味の無い料理をこれ以上食べる気にはなれなかったし、やっと、明日は休日なんだ。

例の吸血鬼の記憶を、“彼女”がカテゴライズしてくれているから、それをゆつくりと二人で観賞するつもり。

“彼女”との楽しい休日を思い描きながら、僕はまっすぐ、家路を歩いた。

僕が部屋に入ると、勝手に照明が付き、夕方の終わりが近づいた薄暗い部屋を一気に明るくする。

「おかえりなさい」

無機質な、いつもの“彼女”の聲が、僕の耳に届くと、僕はほっと息をついた。

「ただいま」

知らず、口元に笑みが浮かび、姿の见えない“彼女”を見ようと、視線は天井をさまよった。

「やっと、休暇がとれたよ。おまたせ」

「お疲れ様：なのは、あなたの補佐官たち、かしら??」

くすくすと冗談っぽく笑う“彼女”が僕の眼に浮かぶ。

「そのとおり」

神妙に僕は頷いた。

ふふつと彼女が笑う。

「それで、お楽しみの上映会は、いつごろ開始する??」

「今すぐにも、と言いたところだけれど、シャワーを浴びてきていい??」

汗でべとべとなんだ」

僕は襟元を右の人差し指に引っ掛けて伸ばす。

「どうぞ、ご自由に。データは逃げないわ。消えることはあってもね」

「そんなイージーなミス、君がやるとは思えない」

“彼女”の許可を得た僕はクロゼットから着替えやらを適当に引っ張り出しながら話す。

「あら、わからないわよ。」

データが膨大だから、バックアップはとってないし。

バックアップしようとした場合、メモリチップがどれだけ必要か、あなたわかる?」

「僕がわかるのは、君が膨大というくらいだから、相当量だってことだけは判断できる。」

けれど、君のことだから、僕らに関連しそうなデータはバックアップしてる、でしょ?」

「それくらい頭が回るなら、シャワーなんて浴びなくても、緊張はおさまったんじゃない?」

彼女の応えは、肯定でも否定でもなかった。

その応えに僕は、意地悪く笑う“彼女”が見えた気がした。

ああ、君は僕以上に僕を知っている。

「それでも汗臭いのに変わりはないからね」

苦笑いを浮かべながら、僕はいったん、シャワールームへ向かう。確かに僕は、あの吸血鬼の記憶が、僕に何を見せてくれるのか、

楽しみだけど、多分怖くて、それは緊張という言葉がしっくりくる気がする。

待ちに待った上映会なのに、未だに自分を焦らしているんだから、多分ではなく、確実に、“彼女”の言う通り。



「どうだった？」

“彼女”はカテゴライズの作業時点で、データの内容をすべて把握している。

僕がどんな反応をするのか、気になっていたんだろう。

僕はほう、と溜息をついた。

「おおざっぱにまとめるなら、人知は未だ、無知に等しい、だね」

2時間の上映につき、30分の休憩をいれる、というルールで始めた上映会。

それを4サイクルをこなしたところで、僕は音を上げた。

それまで“彼女”は僕の求めるままに黙って映像を繰り返し出していたが、やっと感想を聞いてもよいと判断したようだった。

「驚いた？」

「驚いた…、そうだね、衝撃的だ」

目を酷使しすぎて、頭痛がする。

僕はどさりとお気に入りのベッドに身を投げた。

照明の光が、勝手にほんのり明るい程度に調整される。

「少し寝るでしょう？ずっと、起きてるものね」

「うん、疲れたよ。」

あとで、ね。おやすみ」

「ええ。おやすみなさい」

照明が、完全に消された。

眩しい。

ゆっくりと開いた眼に映るのは、窓。

カーテンを透過する光が、眩しい。

時刻はわからないが、昼みたいだ。

「お目覚め？」

“彼女”の無機質な声。

「おはよう」

あいさつをしながら僕は仰向けになるよう転がると、腹筋の力だけで起き上がる。

「それを言うには、遅すぎるわ」

言われて時計に目をやれば、午後3時前だった。

彼女の言う通りだ。

「準備は？」

彼女が聞く。

「今から始める」

僕は天井を見上げてから、ベッドから降りた。

シャワーを浴びた後、戦闘服に着替え、装備を確認する。

食事を済ませてから、保存のきく食べ物を適当に見繕ってバイクに乗せた。

バイクに跨ってゴーグルを装着すると、通信が入った。

「忘れ物は？」

聞こえてくるのは彼女の声。

「あるよ。沢山」

僕が冗談めかして言うと、彼女が笑った気がした。

「沢山忘れ物があったとしても、私を置いていくのはやめてよね」

「わかってるよ。今から迎えに行くよ」

「よかった。じゃあ、私は準備万端で待ってるわ。」

忘れ物なんて一つもなく、ね」

それができる君が、僕は少しだけうらやましい。

僕は彼女を迎えに行くべく、バイクのエンジンをかけた。

### 39（後書き）

遅くなりました……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2975m/>

---

紅い瞳に映る赤

2010年12月22日21時55分発行